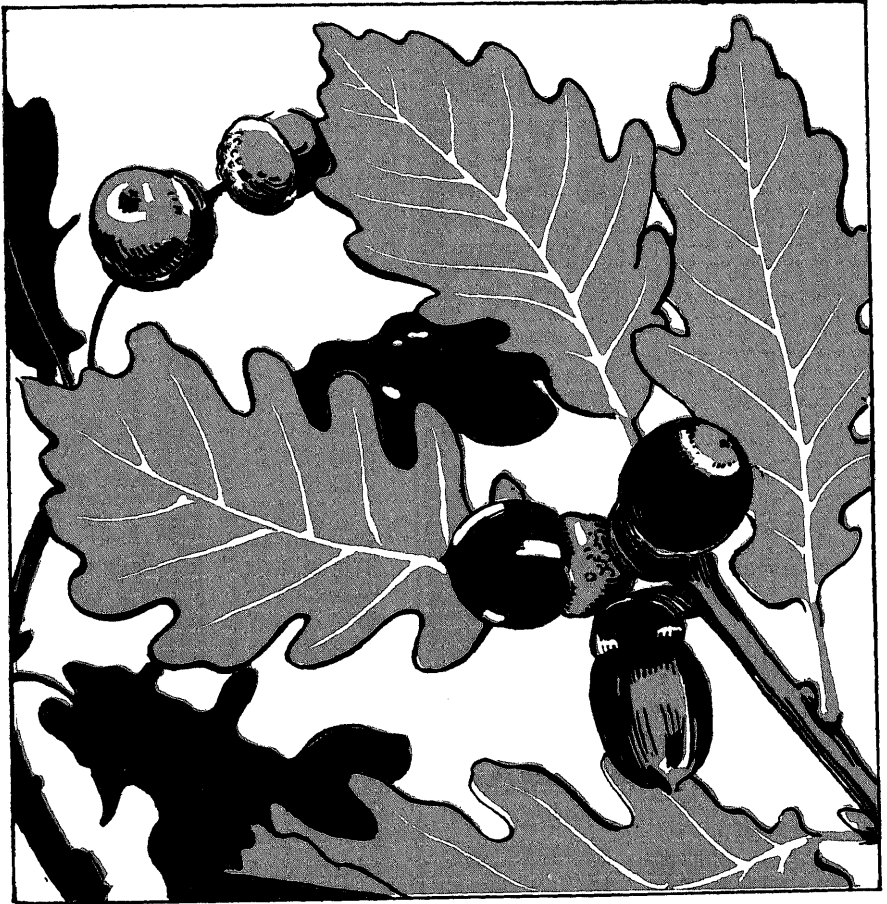


幼 兒 教 育

第 三 十 七 卷 十 一 月 號 第 十 一 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內
日 本 幼 稚 園 協 會

廣島文理科
大學教授

文學博士久保良英著

菊判洋綴紙數三百頁
定價金二圓八十錢

送斜廿一錢

新刊

兒童の精神構造と指導

本書は心理學上より兒童の精神構造を科學的に解剖し、體係を立てて以て兒童教養の根本義を確立せるものである。兒童の教養は次期の國家の消長を決するものであるが、特に現今我國は非常の時局に立ち何事にも國民總和の力を以て當るべきの秋である。著者はここに大に感ずる所あつて、世の教育家父兄の爲に特に本書を著したのだ。先生は我邦心理學界の泰斗で、本書は其深奥なる學問と豊富なる經驗との完全なる融合である。左に其大綱を擧ぐれば……一幼兒の精神構造 二玩具の選ひ方 三言語と文字の交友についての注意 五問題の子供の導き方 六家庭に於ける知育 七美の情操陶冶 八道徳教育 九宗教教育……一般教育家は勿論一般識者の必讀を望む。

東京高等師範學校教授

文學博士

小野島右左雄著

心理學要説

菊判紙數四百頁
定價金二圓十五錢
送料一十二錢

教育の基礎となる
新しい心理學説

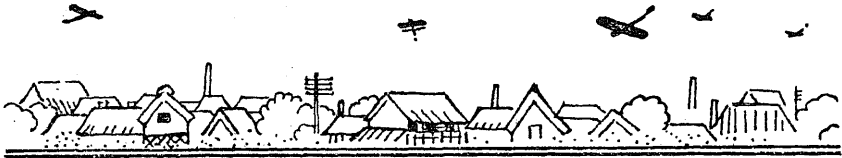
文檢要書

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於て重大なる進歩と新らしい分野の開拓とを意味するものである。斯様な時期に當つて著者は本書に於て單なる紹介や學説の羅列をさげ、専ら見方を教へ考へる論を以てし、傍諸家の説にふれ一方其内省よりして東洋思想の色彩も又濃厚である。此の意に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

振替電話
東京三三三番
八三二番
四二五番
七二番

店書館文中

發行所
東京市牛込區
牛込一丁目
四七番



第 一 十 號 幼 兒 教 育 の 幼 兒 卷 七 十 三 第

— (次 目) —

口 繪

| | |
|--------------------|----------|
| 卷頭—この秋…………… | 倉橋惣三(一) |
| 幼児の遊び(一)…………… | 牛島義友(五) |
| 幼児童話について…………… | 小川未明(四) |
| 百合子さんの遠足のお話…………… | 武田雪夫(七) |
| 時局の映する保育の二三…………… | 及川ふみ(二四) |
| フレール賞童話 | |
| 選外佳作 蝶々のくびかざり…………… | 高桑博子(三) |
| かたつむりさん…………… | 宮田國子(五) |
| ふしぎな卵…………… | K · S(元) |
| メダカの坊や…………… | 小原すみ子(四) |
| 田舎の子供…………… | 常石 貞(五) |
| 幼児教育の文化性(三)…………… | 倉橋惣三(五) |

長尾 豊著 「幼稚園・低學年に應用」

四六判美裝振假名付
挿圖入二八〇頁函入

定價一圓五十錢
送料十四錢

お話の活かし方

お話をするのに
繪を使へば子供
達は夢中になる
紙芝居がそれだ
が何處にても轉
つてゐるピンは
瓢逸て目先が變
つてゐて子供を
忽ち捉へて了ふ
新しい話方だ！

子供にお話をする時どうしたら最も効果が擧るか？ 紙芝居が子供の心を捉へるのは繪が想像を活かすからだ。若しそこらあたり何處にでも轉つてゐるピンを人形に仕立て、お話が活かして話せるとしたらどんなに面白いだらう。お話の活かし方とピン人形の作り方を懇切に指導す。

〔内容一巡〕—ピン人形に就て— 人形の造と記事・舞臺で見た人形・ウエスリイ傳の一節・説明と紹介の仕方・お話と人形の動き・やさしいお話風・ピン人形のお話と劇・いろいろのピン人形のつくり方・條件としての簡素・いくらかの仕殘し・簡單に仕上げる要領・人形の顔（首）と手足・着物冠り物持ち物・その他・ピン人形應用のおはなし・鬼ヶ島へ、しつほ、グール、一寸法師、落した斧、もとの風、ピン人形應用の劇— 塚のおうち、小隊のおうち、あしたは、お天気、金のをの、百合若、若くなる— 等、圖入で詳細指導されてゐる。

| | | | | |
|-------|---------------|---------|--------|-------|
| 長尾 豊著 | 新 幼稚園 | ば な し | 價二・五〇 | 送料・二四 |
| 長尾 豊著 | 幼 兒に讀んで聽かせるお話 | 價一・五〇 | 送料・二四 | |
| 長尾 豊著 | 學 年別お話全集（全六冊） | 各一・〇〇 | 送料各・二四 | |
| 長尾 豊著 | 祝 祭 日 お話 | 集 價二・〇〇 | 送料・二四 | |
| 長尾 豊著 | お話あそびと小さい劇 | 價一・六〇 | 送料・二四 | |
| 長尾 豊著 | 劇とお話教育問答 | 價二・〇〇 | 送料・二四 | |
| 千葉春雄編 | 話し方聞き方の實際研究 | 價一・八〇 | 送料・二四 | |

著二 謙 澤 上 (春秋夏春) 日五十六百三しなば兒幼新 ☆
四一各送 〇二・二各 (冊四全の)

いさ下利用御を部理代
京東替振取扱本刊社各
宛部置代番三四七六七



町番六下・町廻・京東
番〇〇六九五京東替振
番八一二三段九話電



秋
の
陽

育教の兒幼

月一十年二十和昭

この秋

倉橋惣三

この秋は常の秋ではない。だが、けふの空のなんさきれいに澄んでゐるこゝか。子ども達は、暖い日光に可愛いらしい頬を紅潮させて、嬉々として遊んでゐる。朗かな笑ひ聲は幼稚園の庭一ぱいに擴がつてゐる。私の胸には、なんだか込みあげて來た。あゝ、有り難いこゝだ。

○

この保育期の初めから、幼稚園の山の上に、毎日國旗を立てるこゝにした。各組の幼兒が當番さいつた順で、受持の先生につれられて、主事室の國旗をもつて山へ上つて行つて、綱に結びつけて、きりくくさ曳き揚げるのである。旗竿は太い檜の丸材で六間餘り、朝風に揺られながら段々に昇つてゆく國旗は、その竿頭でばつさ翻る。子ども達にまつては、ぐつみ胸を張つて、頭上に打ち仰ぐ高さである。

その國旗掲揚の第一日、幼兒達をその下に圓く集めて、「日本の旗 日の丸の旗」を

合唱した。その時、小松耕輔氏が、その作曲者として特にコンダクトを振つて下さつたことは、私達はもとより、子ども達を一段喜ばせた。

につぼんのはた ひのまるのはた

たかくたてよ たかくたてよ

あさひのいろを あかくそめて

あかるいそらに ひら／＼／＼

かゞやくひかり ひのまるのはた

につぼんのはた ひのまるのはた

たかくたてよ たかくたてよ

小松氏の作曲は、私の歌には勿體ない程立派なものだ。豫て組々で先生方に教へられて、立派に唱つて呉れた幼児の齊唱も、私の歌には勿體ない程いゝ出来だつた。

「今、日本の兵隊さん達は、支那に行つて戦をしてるて呉れますね。みんな日本の國のためですね、天皇陛下の御ため、國のために戦つてゐるのですね。強い。強い。ほんまに強いのですね。その強い兵隊さんに、ぐん／＼勝つて貰ひませうね。此の日の丸の旗を見上げてゐるを、兵隊さん達の強いこゝが思はれて來ますね。そうして、日本帝國萬歳を、大きな聲でいひたくなつて來ますね。……」

私は、こういつて幼児達に話した。

○

保育室を歩いて見るに、まこの室にも、紙製の軍用帽と防毒マスクが置いてある。ある室には、事變ニュースの寫眞が大きく貼つてあつたり、大さつばなりに色分けにした日支地圖が貼つてあつたり、絲を引き渡して紙製飛行機が幾つも／＼かけてあつたり、机の上の青色紙を海を見たて、紙製軍艦が澤山列べてあつたり、流石に事變氣分が漲つてゐる。そういへば主事室にも、特に海軍省から貰つた大きな支那地圖が二枚壁一ぱいに貼つてある。――斯うした中で、幼児と先生との間に、又、幼児達の間に、事變に就ての話が豊富に行はれてゐることは言ふまでもない。幼児達の間に、戦争遊びの盛に行はれ、先生も屢々それに應召されてゐることも言ふまでもない。

が、しかし、私達、この中で一つのことは氣をつけてゐる。支那といふ國そのものを敵として印象させないこと、殊に、支那人そのものを憎むような氣持を煽りたてないこと、之れだけは注意してゐる。勿論、そうしたことを特に正面から言ひきかせたりするのではないが、そんな方へ幼児達を向けないように、若し、そういう傾向が見られたら向けなほす方がよからうと話してゐる。

○

非常時が、非常時として、常時は異つた力を教育に與へて來ることは勿論である。子ども達の心にも、子ども達相應に、國家意識が強められるであらうこと、全國民の生活緊張の中に、氣持の緊張が、幼い心にも與へられるであらうこと、それ等は當然のことであり、又、導かなくてはならぬことでもある。しかも、私達は、自分達が如何に非常の生活をする時であつても、幼い子ども達には、常の生活としての重要なものを失はせないようにしなくてはならない。非常時を、

子も達の教育の上に積極的ならしめることが大切であると共に、消極的ならしめることからは、つぎめて、幼いものを護らなければなるまい。大人は何を食つても、幼いものゝ榮養は減じてはならぬ。大人はどんなに忙しく働いても、幼いものゝ遊びを奪つてはならぬ。大人は如何に嚴肅であつても、幼いものから笑顔を失はせてはならぬ。非常時には非常時の教育があると共に、子も達の教育の常なるものは、忘れてはならず忘つてはならぬ。

この秋の幼稚園の庭に、一ぱいに擴つてゐる幼児達の嬉々たる幸福を見て、有り難いことだと思つたのも、この點であつた。

○

この幼稚にもさいふ譯ではないが、幼稚園にも出征將士の子がゐるのである。國からは、さういふ場合、事情に従つては保育料を免するようによこの通課も出されてゐるが、さういふ取扱ひの有無に拘はらず、幼稚園としては一段の意を用ゐて、父の出征中の子を護らなければならない。實際に於てさういふ途が必要であるかは同一でない。又、必ずしも、大切な大切を愛撫するのがいふ譯では決してないであらう。しかし、家庭を協力を一層密にして、必要な「家庭教育の補ひ」がそれなくあるでもあらう。殊に、御國のために父の留守の子である。必要さいふ事情の有無に拘はらず、先生の情の籠るは自然であらう。「毎日幼稚園で變りなく楽しく、元氣にいたして居ます」さういふ一行は、出征せる父への、どんな大きな慰問になることであらう。

幼児の遊び(二)

牛 島 義 友

かつてフーバー大統領は兒童の健康並びに保護に關する白聖館會議を開き、關係諸大家を召集して討議研究せしめたが、その時の重要な結論の一つとして「子供は遊戯を通して自己の人格ミ能力を發達させ、將來、立派な社會人ミなる備をなす」ミ述べてゐる。遊びが幼児の生活に取つて如何に重要であるかは議論の餘地はなく、その生活を一目すれば明瞭である。即ち彼等は絶えず遊び、遊びつゞけて居る。

善き玩具を具へ、よい遊びを教へる事は幼児教育の眞諦である。先に幼児の玩具に就いて調査の結果を報告し、併せて標準玩具の試案を掲げたが、その際にも約束した如く今回は幼児の遊び方に就いて研究結果を述べ度いと思ふ。

第一部 幼児の遊び方

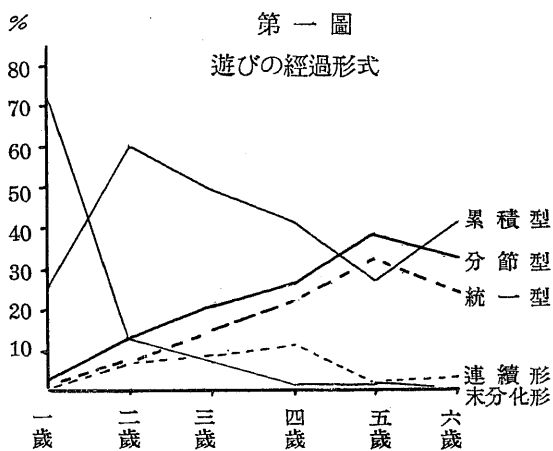
「幼児の玩具」を調べる場合に同時に子供の一時間の遊び方を連続的に觀察して貰つた。此の直接觀察に基づいて研究を進めて行く。觀察した時間数は男兒一八七時間、女兒二一〇時間、合計三九七時間に互り、満一歳から満六歳迄の幼児を包含してゐる。

之等をまづ一時間内の遊びの經過状態、その時間的關係、遊びの種類、更に一つの遊び方の分析、遊び相手等に分けて整理して行く。

一 遊びの經過 一時間の遊びの中、幼児の遊びが如何に展開し變容して行くかを調べる。此の中には只取り止めもな

く遊びミ名付ける事も出来ない様な行動をしてゐるものから、一時間中一つの遊びを中心ミして組織的に遊んでゐるものに至るまで種々雑多の遊び方が見られる。今之を五つの類型に分けてその年齢的關係を調べて見る。

第一圖
遊びの經過形式



- 1 未分化的遊戯活動
~~~~~  
 $a+b+c+d+\dots\dots\dots$
  - 2 累積的遊戯活動  
—————  
 $a$
  - 3 連續的遊戯活動  
—————  
 $A+B$
  - 4 分節的遊戯活動  
—————  
 $A+B$
  - 5 統一的遊戯活動  
—————  
 $A$
- 先づ未分化的遊戯活動ミは殆ど二、三分おきに變つた行動をし、而もその一々の行動が遊びミいふ程のものでなく、唯自動車をいぢつて見る、椅子から飛ぶ、ミ云ふ風の事を別に連絡もなしに行つてゐるものである。故に之を波型の符號で現はして見た。此の遊び方は満一歳兒の代表的遊び方でその後は餘り見られないもので、従つて最も原始的な遊び方ミ云へやう。(第一圖参照)

次に累積的遊戯活動ミは斷片的遊戯活動がモザイク的に集つたものである。例へば繪本を見る——線をメチャクチャに描く——菓子をねだる——自動車をいぢる——ラヂオのスイッチやアルバムをいぢる——ラヂオを聞く、ミ云つた様な遊びが続いてゐる。一つ一つの遊びは十分位續いてゐるが、次の遊びとの連絡がない遊び方である。それは満一歳兒に最も多く、その後も最も多く見られる型である。いはゞ幼兒時代の代表的遊

び方である。併し五、六歳になるに減じ他の型に變る傾向が見られる。

次に連續的遊戯活動は同じ様な遊びが一時間中繼續してはるるが、第五の類型の様に全體が統一の方針や仕組によつて進展するのではなく、一つの遊びがそれと關係ある他の遊びに發展したり、或ひは他の遊びを取り入れて一つの遊びになつてゐる。例へば大體買物遊びをしてゐるがその合間に惡戯をして見たり、お八つをねだつたり、貰つたお八つを利用して遊び、又再び買物遊びに戻るに云ふ工合である。之は餘り數多く見られないものであるが、統一型と區別する爲に別に取り扱つた。

分節的遊戯活動はちやんこ纏つた遊戯活動が二、三十分續いてゐるものである。例へば、繪を描くとか砂遊びをして居り、一つの遊びに飽いて他の遊びに移つて行くものである。一時間の中には二つ位の遊びしか見られぬもの(A×B)である。之は四、五歳頃から數多く見られて來るものである。

統一的遊戯活動は一時間の大部分が積木とか飯事、砂遊びに費やされ、その飯事の仕方も大體型にはまつたもの、先づ家を作り、訪問し、或ひは來訪され、お茶を出し、料理をし晩になるに寢み、朝起きて外出するに云つた様なもので、此の型も分節型と同様に年齢と共に増加し、従つて幼児後期の重要な遊び方である。

以上を概括すれば一歳兒の遊戯は未分化的で若干のものが累積的の遊び方をなす。滿二、三歳に於ては累積的、斷片的の遊び方をなすものが大部分である。四歳頃からは分節的、統一的遊び方がふえ、五、六歳兒に於ては此の三つの遊び方が同様に見出される。

換言すれば低年齢の者にはその遊びに一定の方向がなく種々の外的刺戟、內的衝動に驅られて興味を赴くまゝに轉々遊びんでゐるが、四、五歳頃からその遊びに一定の方向が定まつて來てゐる。此の方向性の缺如、或ひは薄弱が低年齢の幼

兒の特色である。

二 一遊戯の繼續時間 次に一時間内に現はれた諸遊戯行動の中、最も長いもの丈につきその時間を計測して見た。その結果を示す第一表の如くなり、二歳兒は平均二十二分餘、年齢に應じて増加し、五歳兒に於ては三十三分近くも一つの遊戯に耽つてゐる。男女の差は大してないが、唯六歳男兒の場合に時間が却つて短くなつてゐる。以上の事實は年齢と共に一つの遊戯に長く携はる事が出来る様になる事を示してゐる。又此の時間は幼兒教育の時間編成に重要な指示を與へるものである。即ち彼等に興味さへ抱かすならば之位の時間一つの仕事を繼續させても不都合はない。子供が飽き易いこの理由から無暗に色々變つた事をさせる傾向があるが之は正しくない。二歳兒でも二十分位の活動に耐え得る。又一方餘りに長い時間一つの仕事をさせるのは適當でない。幼稚園兒には三十分以上の仕事をさせるのは不適當である。

第一表  
一遊戯の繼續時間

| 年 齡 | 男 兒 |            |       | 女 兒 |            |       | 合 計 |            |       |
|-----|-----|------------|-------|-----|------------|-------|-----|------------|-------|
|     | 人數  | 平 均<br>時 間 | 分     | 人數  | 平 均<br>時 間 | 分     | 人數  | 平 均<br>時 間 | 分     |
| 滿二歳 | 34  | 25.2       | 15.12 | 34  | 19.4       | 11.56 | 68  | 22.3       | 13.38 |
| 滿三歳 | 38  | 27.8       | 16.68 | 62  | 23.3       | 14.38 | 100 | 25.6       | 15.56 |
| 滿四歳 | 39  | 30.5       | 18.27 | 36  | 29.9       | 17.84 | 75  | 30.3       | 18.11 |
| 滿五歳 | 33  | 33.3       | 19.98 | 42  | 32.6       | 19.51 | 75  | 32.9       | 19.74 |
| 滿六歳 | 20  | 21.8       | 13.08 | 17  | 37.5       | 22.50 | 37  | 29.6       | 17.77 |

三 遊戯の種類 次に一時間内の最長遊戯に就いてその種類を調べて見た。全

體を二十種類の遊戯に分類するに次の様になる。

運動的遊戯

曳き車遊び—木馬、動物車等を曳いたり乗つて遊ぶもの

三輪車遊び—三輪車、乗用自動車、自轉車に乗つたり、押し歩くもの

ブランコ遊び—ブランコ、辻り臺、繩とび

ボール お手玉遊び—ボール、鞠つき、獨樂、風、達摩落し、お手玉、おはじき、風船等の練習的遊び

競争—かけっこ、かくれんぼ等の玩具を用ひない運動的遊びを一括した

蟲捕り—蟬とり、蜻蛉捕り等

### 想像的遊戯

人形遊び—人形をいぢつたり、着物を着せたりするもの、及び飯事

自動車遊び—自動車、電車、汽車、飛行機等の乗物玩具で遊んでゐるもの

模倣遊び—汽車ごっこ、電車ごっこ、車掌ごっこ、學校遊び、お客ごっこ、買物遊び、電話遊び、お神樂の眞似、或ひは床屋や、お

化粧の眞似、等所謂何々ごっこ云はれるもの

兵隊遊び—戦争ごっこ、斬り合ひ、鐵砲いぢり等

水遊び—水鐵砲、鹽に色々浮べて遊ぶ水遊び、特に想像的とは云へないが砂遊びと多少趣きの異なるもので此の方に入れる

### 知的遊戯

砂遊び—砂運び、團子作り、トンネル、山等作るもの。之は水遊びと異なり或る形を構成して行く事に興味を持つ遊びである

積木遊び—説明するまでもなく最も知的である

描畫—繪や字を書いたり、塗繪をして楽しむもの

手技—折紙、色紙貼り、千代紙等で遊ぶもの

繪本—繪本を讀んだり、讀んで貰つたりして遊ぶもの

### その他

蓄音機、歌—レコードをかけさせたり、童謡を歌つたりして楽しんで遊ぶもの

第二表  
遊戯の種類並に繼續時間

| 種類      | 遊び種類の% |       |       | 遊戯繼續時間 |       |       |
|---------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|
|         | 男      | 女     | 計     | 男      | 女     | 計     |
|         | 177    | 210   | 387   | 177    | 210   | 387   |
| 人形遊び    | 5.1%   | 28.1% | 17.6% | 31.2分  | 30.0分 | 30.2分 |
| 自動車     | 16.9   | 1.4   | 8.5   | 26.1   | 24.0  | 25.8  |
| 模倣遊び    | 7.4    | 8.6   | 8.0   | 29.4   | 32.1  | 30.9  |
| 砂遊び     | 5.6    | 8.6   | 7.2   | 31.8   | 27.0  | 28.8  |
| 積木      | 9.0    | 4.8   | 6.7   | 32.7   | 24.9  | 29.7  |
| 水遊び     | 6.8    | 5.7   | 6.2   | 41.4   | 21.2  | 31.2  |
| 描畫      | 5.6    | 6.7   | 6.2   | 22.8   | 24.9  | 24.2  |
| 繪本      | 6.2    | 6.2   | 6.2   | 21.6   | 24.6  | 23.1  |
| 手技      | 2.3    | 6.7   | 4.7   | 32.1   | 26.7  | 27.9  |
| 三輪車     | 7.9    | 0.5   | 3.9   | 30.3   | 12.0  | 29.1  |
| ボール、お手玉 | 2.8    | 3.3   | 3.1   | 19.8   | 23.4  | 21.9  |
| 兵隊遊び    | 5.1    | 0.5   | 2.6   | 23.7   | 12.0  | 22.5  |
| ブランコ    | 0.6    | 3.3   | 2.1   | 18.0   | 21.3  | 20.7  |
| 引キ車     | 3.4    | 0.5   | 1.8   | 24.3   | 21.0  | 23.4  |
| 蓄音器、歌   | 1.7    | 1.4   | 1.6   | 12.9   | 21.6  | 17.1  |
| 双六類     | 2.3    | 1.0   | 1.6   | 29.1   | 10.5  | 21.6  |
| 蟲捕り     | 1.7    | 1.0   | 1.3   | 24.0   | 19.5  | 22.2  |
| 競争      | 1.7    | 0.5   | 1.0   | 20.1   | 9.0   | 17.4  |
| 雜器いぢり   | 4.0    | 2.9   | 3.4   | 20.7   | 18.9  | 19.8  |
| 動植物     | 1.1    | 2.4   | 1.8   | 20.4   | 20.1  | 20.2  |
| 雜       | 2.8    | 6.2   | 4.7   | 30.6   | 20.7  | 23.4  |

双六類—双六、將棋、トランプ等の勝負事をして遊ぶもの

雜器いぢり—ミシン、箱、バラソル、針、藥、切符、小石、カード、繪葉書、ボール紙等種々のものをいぢくつて遊ぶもの

動植物いぢり—生きてゐる猫や犬を相手に遊んだり、花に水をやつたり、花を摘んだり、葡萄を採つて遊ぶもの

雜—その他布團の上で騒ぐとか、他の子供の遊びを眺めてゐるとか、母親の仕事の邪魔をするとか云つた類ひのものを一括した

次に之等の遊戯の表はれた状態を表示するに第二表の如くなり、男兒に於ては自動車遊び、積木、三輪車、模倣遊び、砂遊び、水遊び、繪本、描畫、砂遊び、人形遊び、兵隊遊び、その他の順になつて居り、女兒に於ては人形遊び、模倣遊び、砂遊び、手技、描畫、繪本、水遊び、積木、お手玉、ブランコ、その他の順になつてゐる。男女によつて相違はするが以上舉

げた遊びは屢々遊ばれ、從つて幼兒の好きな遊びに云ふ事が出來やう。

尙水遊び比較的屢々現れて居るのは、此觀察が夏季に行はれた爲で此點は斟酌する必要がある。

次に之等の遊びの遊ばれる繼續時間を調べるに第二表の右欄の様になる。人形遊び、

第三表  
遊戯種類と年齢との關係

| 年號<br>種類 | 二歲    | 三歲    | 四歲    | 五歲    | 六歲    | 計     |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 運動的遊戯    | 12.7% | 12.9% | 14.6% | 10.8% | 16.3% | 13.2% |
| 想像的遊戯    | 43.7  | 41.6  | 42.7  | 45.7  | 39.6  | 42.9  |
| 知的遊戯     | 23.9  | 31.4  | 37.8  | 28.9  | 32.6  | 31.0  |
| 其他       | 19.7  | 13.9  | 4.9   | 14.5  | 11.6  | 12.9  |

男兒の自動車遊びを示す。

兄の前に坐つて自動車をいぢる。兄にネヂを巻いて貰ひテーブルの上で走らす——一人でネヂを巻きギョー音を出して動いたくと喜ぶ——今度は手で押して走らせ室中押し廻る——次に小さい自動車をもう一つ持つて来て大きい自動車のネヂを兄の所に持ち行き巻いて貰はうとしたが相手にされないのので他の兄弟の所に持つて行く——次に自動車を持ち乍ら走り廻るにつて遊ぶ(以上十五分間)。

此の場合には自動車を動かしたり、いぢる事自身に興味を感じて居り、最も原始的な遊び方である。

模倣遊び、水遊び、積木、三輪車、砂遊び、手技等は三十分前後遊び續けられて居る。即ち屢々遊ばれる遊びは又比較的長く遊び續けられる云へやう。

以上の遊びは更に運動的遊戯、想像的遊戯、知的遊戯その他に大別してその年齢的關係を調べるに第三表の様になり、年齢的相違は大してなく唯知的遊戯が増加してゐる位である。全體として想像的遊戯が最も多く知的遊戯が之に次いでゐる。此の結果は所有玩具の調査の場合と全く一致してゐる。

四 遊び方 次に一つの遊びに立入つてその遊び方を調べて見る。此の爲には遊び道具との關係から見に行く。即ち遊具を直接の對象とし、それを遊び、いぢくり廻し別に他の遊びに入られる譯ではなく、玩具をいぢる事それ自身が楽しみである様な遊び方を直接的態度とし、遊具を用ひても他の目的の手段として取り入れ、間接的に取り扱つてゐるものを間接的態度とする。此の中間に移行的態度もある故に三つの遊び方の類型に分けて考へて行く、例を舉げて説明するならば先づ直接的態度の例として或る二歳一ヶ月



第四表  
遊具への態度

| 遊具への態度 | 自動車遊び |        | 人形遊び |        | 砂遊び  |        |
|--------|-------|--------|------|--------|------|--------|
|        | 2.3歳  | 4.5.6歳 | 2.3歳 | 4.5.6歳 | 2.3歳 | 4.5.6歳 |
| 直接的態度  | 5     | 2      | 9    | 1      | 1    | 2      |
| 中間的態度  | 4     | 9      | 12   | 12     | 9    | 8      |
| 間接的態度  | 2     | 4      | 5    | 12     | 0    | 3      |
| 計      | 11    | 15     | 26   | 25     | 10   | 13     |

第五表  
遊び相手

| 年齢 | 一びの<br>人遊時<br>分 | 遊び<br>手数<br>相 |
|----|-----------------|---------------|
| 1歳 | 29.7            | 1.59          |
| 2歳 | 25.9            | 2.16          |
| 3歳 | 16.7            | 2.21          |
| 4歳 | 18.3            | 1.95          |
| 5歳 | 12.4            | 2.04          |
| 6歳 | 16.1            | 1.87          |
| 計  | 19.0            | 2.03          |

五 遊び相手 子供は多くの場合對手を要求する。一人で遊ぶ事は年齢と共に減じて来る。今一人遊びの時間を平均するに第五表左欄の様になり、一歳児は半時間近く一人で遊ぶが、五歳児は十二分位しか一人で遊ぶ

十六分間。  
此の場合、汽車を競争させたり、衝突させて楽しむのは直接的操作以上のものであり、人形を乗客に見立てたり、沈没した船を救助に行くのは遊具を材料として一層廣い想像の世界に遊んでゐるものである。  
以上の態度を自動車遊びに就いて見るに直接的態度は年少の者に多いが、年長の者は中間的、間接的になつてゐる。人形遊び、砂遊びに就いても同様に分析して第四表に掲げておいた。

間接的態度の例 五歳十一ヶ月男児、同年輩の二人の友と汽車、軍艦で遊ぶ、汽車を一つ宛分けて競争する——相手に向ふ側にやり二つの汽車を衝突させやうとする。巧く衝突させると喜び——軍艦を持ち来り、汽車を持つてゐる子供と競争する——小さい汽車を二つ軍艦の甲板にのせて走らせる——人形を甲板に乗せて乗客のつもりにする——ボートを二隻軍艦の傍において乗客をボートに移し、それから又軍艦に乗せる——軍艦が沈没しやうになつたと云つて倒さまに覆し、ボートで救助に行く——次に二つのボートを軍艦に乗せる——今度は長い板を持つて来て横たへ、線路にして汽車を走らせ、壁は海だと云つて軍艦とボートを追ひかけ、海陸の競争させる(以上三

第六表  
遊び相手

| 遊び相手 | 1歳   | 2歳   | 3歳   | 4歳   | 5歳   | 6歳   | 合計   |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 員数   | 54   | 138  | 195  | 130  | 119  | 62   | 698  |
| 父    | 3.7% | 6.5% | 3.6% | 1.5% | 1.7% | 4.8% | 3.6% |
| 母    | 27.8 | 23.9 | 15.9 | 11.5 | 13.4 | 12.9 | 16.9 |
| 姉    | 5.5  | 9.4  | 19.5 | 15.4 | 17.6 | 14.5 | 14.9 |
| 妹    | 1.9  | 2.2  | 4.6  | 1.5  | 5.9  | 11.3 | 4.2  |
| 兄弟   | 11.1 | 8.7  | 13.9 | 12.3 | 10.1 | 11.3 | 11.5 |
| 友    | 3.7  | 10.2 | 13.9 | 29.2 | 26.0 | 19.3 | 17.8 |
| 祖母   | 11.1 | 5.8  | 3.6  | 0.8  | 0.8  | 1.6  | 3.4  |
| 女中   | 7.4  | 13.0 | 6.7  | 9.2  | 5.0  | 3.2  | 7.9  |
| 叔母   | 11.1 | 5.1  | 2.6  | 1.5  | 1.7  | 3.2  | 3.4  |
| 赤ん坊  | 1.9  | 2.2  | 1.0  | 0.8  | 0.8  | 0    | 1.1  |
| 観察者  | 3.7  | 4.4  | 5.1  | 6.9  | 4.2  | 11.3 | 5.6  |
| その他  | 11.1 | 8.0  | 5.6  | 1.5  | 5.0  | 1.6  | 5.3  |

ず、相手を要求する。相手の数は同表右欄の如く年齢は餘り關係なく平均二人位である。之は相當に多い數を考へられる。一時間遊ぶのに二人も相手が必要なのである。

此の相手としては家族の者が大部分で吾々の觀察によるに、家族四七四名に對し、家族以外の者二四名であつた。如何なる人が最も多く相手をされるかを見るに、第六表合計欄の如く、友達、母親、姉、兄、女中等である。

併し之を年齢的に見るに興味ある變化が見られる。母親を遊び相手とする者は年少の者には非常に多いが、その後減じて来る。祖母、叔母を相手にする者も同様である。之に對し姉、友達を相手とする者は年齢と共に増加してゐる。即ち親子の狭い生活範圍から兄弟或ひは同年の友へに擴大して行く。而してその變化は三、四歳頃に特に著しい様である。更に遊び相手への態度を詳細に分析して見るに相手が傍にゐても殆どそれに拘らず一人で自分のしたい事をなしてゐる者がある。之は年少の者に特に多い。又自

分が出来ない場合に誰かに手傳つて貰ふ者、或ひは年長の者と一緒に遊んでゐるが専ら彼に指導され、その命のまゝに動いたり真似をし乍ら遊んでゐる者がある。之等も年少の者に多い。之に對し眞に相手を共同して一つの遊びを營む者は年長の者に數多く見られる。アルステーヌは二歳兒は約一〇%しか、積極的に他と共同して遊ばないのに、五歳兒は七〇%が他と共同してゐるを報告してゐるが、斯かる傾向は吾々の觀察にも見られた。(未完)

# 幼児童話について

一四

小川 未明

何よりも、これは、小さな子供のために書くのだといふ、はつきりとした、心の持方が大切であります。なぜなれば、目標を定めなにかぎり、そのお話には、ついに一つの中心點が見出されないからです。それは、作者の心の動搖を意味するものです。そのためには、對象となる子供達の年齢といふことが、重要な問題でなければなりません。

その年頃の子供達の特質や、生活といふものを親切に理解し認識して、はじめて自然な感銘を興ふる事が出来るのです。最も多感にして、空想的な四五歳頃の子供達について考へるいゝ例があります。その時代の子供達がお母さんから、お話をきかうとする時の有様はどんな風であらうか？。

毎晩、日が暮れると早くから床に入つて眠る子供は、

「お母さんでなければいや」と、いひます。いつも、お話をして下さるからです。けれどお母さんは、まだ仕事が付かないのです。兄さんか、お姉さんかに、寝かしておもらひなさいといはれても、子供はききません。

「しやうのない子ですわね」と、ついにお母さんは、負けてしまつて、子供をつれて行かれます。果して、子供は、「お母さん、お話をしてよ」と、いつものやうに、お話をきながら、眠らうといふのです。

それを知つてゐるお母さんは、さうしても子供にお話をしなければならなくなる。そして、考へても新しいお話が、さうすぐに浮んで来ないので、またいつものお話をすることになります。

これまでお母さんの創作で、態度をなくきいた、「兎も獵人」のお話は、殆んど暗誦してゐる位であるから、子供はまたかきいつて、喜ばないさかいふに、決してさうでない。子供は却つてそのお話に對して、限らない親しみすら感じてゐるのです。

たゞ問題は、お話そのものになくして、お母さんの態度であります。もしお母さんが、まだ仕事があるので、その方へ氣を取られて、肩にかけた襷をはさずさすにゐるなら、子供は、それに對して不平をいふではありません。それから、いつものやうに、自分さいつしよに横はるやうにさせがむにちがいない。恐らく、五分か、十分の後には、すやくも眠つてしまふのであるが、ゆつくりさ、この話を味はうさ考へるからです。義務的にきかしてもらふお話では、全く有難くないのです。子供は、話を介して、眞にお母さんさいふものに觸りたいのです。それで、頭の中で、全く熟さない思想や、表現が、子供の頭に入りにくいのは、ちやうさこのやうなものです。であるから、先を急ぐために、お話のある部分を飛ばしたり、改めたりするやうなことがあれば、子供は、すぐに、

「あゝ、ちがつてるる、お母さん、忘れちやつたのさ、いひます。さうしたことが、いままでの子供の氣分を傷ふばかりでなく、甚だ調和を缺き、不自然に感じられたためです。

之に反して、もしお母さんが、ゆつりさした氣持で、いつものお話に、さらに尾緒を附けて、面白く語らうものなら、子供は、こんなに喜んでありませんか。

子供は、お母さんの話をきながら、みんなお爺さんで、みんな山の中で、みんな様子でさ、さまざまに想像してゐる際であるから、お母さんの説明が、ぴつたりさ自分の想像に合したなら、ほんたうに目で見るとやうな氣持がして、それ程うれしく思ふかしれません。そして、そのこきは、お母さんの説明が、極めて自然であつたさいふこほになります。子供は、年齢に相應した經驗以外に空想を描き得ないから、子供に親切な説明は、即ち、子供をよく認識して、理解して、は

じめてなされることになるのです。また、子供さいつしよに童話の世界に浸ることにもなるのであります。

徒らに筋を複雑にしたり、刺戟的にしたり、目新しい事柄をすること、必ずしも子供を喜ばせるかといふに、決してさうでない。自然ならざるものは、子供の心を掻き亂すことはあつても、平和公正の眞の喜びを判断を教ふるものにはならないのです。成べく、幼児に對するお話の筋は單純に、自然に、素直にして、明朗なものがいゝのであります。人間完成の意味からいつても、氣分の統一といふこと、感情の純化といふことが何より大切なことであつて、これが教化としての、讀ませたり、聞かせたりするお話と關係することが、極めて多いのであります。

平明にいへば、お話をする者の態度が、一番肝要になるのであります。先づ子供に、平和な安心な氣分を與へ、次に、子供と共にそのお話の世界に浸り、善美の方へ憧かれることです。このことは、お話をする場合にも、またお話を創作する場合にもいはれます。同情の眼をもつて、子供の姿を自分の前に、はつきり見ること。たゞへ創作する時でも、文章を書くといふ意識からでなく、子供に語るこいふ氣持を忘れずにゐること。そして、幼児に於ては、彼等は、お話の筋を面白がるこいふよりかむしろ、語る者から、深い愛を要求してゐることを、たえず何等か人間的なものに觸れようとしてゐることを、強く知らなくてはならぬのであります。

いつも、お宮の境内へやつて來る、顔馴染の紙芝居の小父さんなら、その小父さんが、たゞへさんな話をして子供は、面白がつてきくであらうし、お母さんや、先生が、またさんなお話をなされても、子供達は、そのにこやかなお顔さへ見れば、半ば満足するのであります。だから、愛をもつて語られる話ならば、さんな話でも面白がつてきくにちがひありません。愛のあるところ、正純な感情の染むところ、いかなる不自然な材料も、自然化されるであらうし、また複雑なものでも、單純化されるであります。故に、幼児のお話は、詩的な童話の中でも特に詩の部類に屬すべきものです。(をはり)

# 新刊 日本の旗 日の丸の旗

倉橋惣三作詞  
小松耕輔作曲 戸倉ハル振付

色刷表紙四六倍判音譜及び振付  
説明  
定價送料共一冊 金參拾錢  
前金(振替或は參錢郵券)を添へ  
冊數及び送先き明記申込次第直  
に送本す

此の時局、幼兒兒童に何を唱はせませうか。どんな遊戯をさせませうか。本會は、今日此の新しい唱歌と遊戯とを全國の幼兒兒童の前に贈り得ることを最も欣快とするのであります。願はくは、皆さまのお力添へを俟つて、幼稚園に、學校に、家庭に、街頭に、津々浦々に、此の唱歌遊戯の流布を見るに至り得んことを。之れが本會の遠慮のない望みであります。

尙、此の刊行によつて得た金額は、實費を除いて悉く國防費に獻金致したいのであります。此の趣旨にも御共鳴下さつて、一冊でも多くお購求下さい。又廣くお勧め下さい。一冊の御購買は即ち同時に國防獻金となるのであります。若し各幼稚園が此の意味に基いて、取りまとめて御注文下さるようなことまで願へるものなら、此の上ない幸であります。そのために表紙も美しい色刷りの家庭向きにして置きました。右本會の二つの希望を御協賛願ひます。

發行所

## 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五  
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
振替口座東京一七二六六番

# 幼児に適する手技を募る

## 募集規定

- 株式會社フレーベル館創業三十周年記念  
— 保育研究資金による懸賞募集第二回
- 應募作品は幼児に適する手技たること。
- 主題、内容、材料は隨意。
- 幼稚園、託兒所保姆諸君の考案自作品たること。(必ず製作の説明及び工作圖を添へること)
- 應募點數任意。
- 荷造に注意して送付されたし。
- 應募者は住所、氏名(誌上匿名隨意)及び奉職園の名稱、所在地を明記のこと。
- 日本幼稚園協會(東京市小石川區東京女子高等師範學校附屬幼稚園内)手技募集掛宛のこと。
- 締切 昭和十二年十一月末日
- 發表 昭和十三年二月十五日本會發行の「幼児の教育」誌上。入選作品は本誌に掲載し、賞狀及賞金を贈呈します。
- フレーベル賞
  - 等一名 金貳拾圓 二等二名 金拾五圓 三等三名 金拾圓
  - 選外佳作五名(賞品贈呈)
  - 審査 (五十音順)
- 朝原梅一氏 及川ふみ氏 岸邊福雄氏
- 倉橋惣三氏 田島眞治氏 山形寛氏
- 和田實氏
- 作品は一切返却しません。
- 尙御不明の點は往復はがきで本會手技募集掛宛お問合せ下さい。

## フレーベル賞に就て(再録)

此の度、株式會社フレーベル館社長高市次郎氏より、同館創業三十周年の記念として、左記の通り、保育研究資金を全國保育界に對して提供せられ、その適切なる使途につき本會に委託せられました。我國保育界のために誠に欣慶事であります。就ては、本會はその資金を保管致すと共に、特に實行委員諸氏を御依頼し御協議を願ひました結果、先づ第一案として、保育上切要なる研究課題を設け、全國幼稚園並に託兒所の保姆諸君の御應募を乞ひ、此の資金を以て其の賞に當つることにになりました。その課題は順次に各方面に互ることにし、その方面毎に權威ある審査員諸氏の厳正なる審査を経て贈呈し、その賞をフレーベル賞と名づけることも御相談ありました。

一金壹千五百圓也 保育研究資金

昭和十二年四月十二日

株式會社フレーベル館社長 高市次郎

右御披露と共に、全國保育界諸賢が奮つて此の計畫に御賛同御援助下さるやう切にお願ひいたします。

昭和十二年四月二十一日

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

## 日本幼稚園協會

實行委員 (五十音順)

青柳美智代氏 朝原梅一氏 及川ふみ氏  
 兼信學氏 岸邊福雄氏 菊池ふじの氏  
 倉橋惣三氏 新庄よしこ氏 高崎能樹氏  
 田島眞治氏 土川五郎氏 和田實氏

## 百合子さんの遠足のお話

武 田 雪 夫

さあ、これは、百合子さんの遠足のお話ですよ。

まあ、今日の日曜日は何てよいお天気でせう。それでは、みんなで遠足に行きませう。百合子さんは、お父さまとお母さまと三人で、遠足に出かけることになりました。

お母さま、ねえやさんが、大いそぎで、お辨當をたくさん作りました。それから、お水筒にお茶を一ぱい入れました。

さあ、それでは出かけませう。

お辨當がたくさんで、まあ、重いこも、重いこも。それでは、お辨當は、お父さまに持つて行つて頂きませう。

さあ、それでは、百合子さんは、何を持つて行きませう。ああ、さうです、さうです。お茶の入つてゐるお水筒を持つて行きませうよ。赤くてきれいなお水筒です。百合子さんが肩にかけるこ、ほんたうに、よく



似合ひますこと。

それでは、お母さまは、何を持って行きませう。さうさう、昨日、お菓子屋さんから買つて来た、おいしい〜お菓子があります。お母さんは、それをお風呂敷に包んで持ちました。

「行つてまゐります。ねえやさん、しつかりお留守居して下さいよ。」

百合子さんは、さう言つて、お父さまやお母さまの先に立つて、元氣よく〜〜〜出かけて行きました。

少し歩いて、乗合自動車にのりました。それから今度は、電車にのりました。

しばらく行つて、その電車から降りるさ、もうそこは、すっかり田舎でした。道には、人があまり通つてゐませんから、安心して歩けます。百合子さんとお父さまとお母さまは、その道をぶら〜歩いて行きました。大きな木にまつ赤な實が、一めんになつてゐました。それは柿の木でした。百合子さんは、お猿さんのやうに、する〜登つて行かれて、柿の實を取つて食べられるさよいな思ひました。

それから少し行くさ、さこかで、高い高い聲で、何かの鳥が、

「キイ、キイ、キイ……。」と、鳴きました。百合子さんは、びつくりしましたが、何だか頭の中が、スウツミしたやうな氣がしました。お父さまは、あれは、「百舌鳥もどくす」といふ鳥ですよと教へて下さいました。

それから、道のそばに太い太い木があつて、葉っぱが、すっかり黄色になつてゐました。その黄色い葉っぱ

ばは、道の上にも澤山おちてゐました。拾つて見るに、みんなお扇子せんすのやうな形をしてゐました。

百合子さんは、その葉っぱを、五枚も十枚も拾つて、ポケットの中へ入れました。お母さまが、これは「てふ」の木の葉っぱですと、さう言つて教へて下さりました。

そら、百合子さんも、お父さまも、お母さまも、たくさん歩いたでせう。ですから、みんな、ほんごに疲れてしまひました。それに、お腹が、もうペコ／＼になりました。

それでは、どこかでお辨當を食べることにしませう。その邊は、きれいな／＼草原です。

さあ、どこがよいでせう？

あちらの木の下にしませうか？それとも、こちらの土手の上にしませうか？

ああ、あそこあそこの小さな木のかげが、すずしさうでよろしいこと。

さあ、お父さまも、お母さまも、百合子さんも、みんな、お坐りしませう。

はじめに、お父さまが、ドカン、大きな音をさせてお坐りになりました。さうするに、こんどは、お母さまが、ペタリとやさしい音をさせてお坐りになりました。さうするに、おしまひに、百合子さんが、お父さまとお母さまの前に、コトンとかはいゝ音をさせてお坐りしました。

お父さまが、に／＼して、

「さあ、早くお辨當を開けて下さい。」

さう、おつしやいました。

お母さまは、大いそぎでお辨當をお開けになりました。

おや、おにぎりです。大きなおにぎりさ、中位のおにぎりさ、それから小さなおにぎりさ、たくさん  
く出て来ました。

大きなおにぎりは、お父さまのです。中位のおにぎりは、お母さまのです。それから、小さなおにぎりは、  
百合子さんのですね。百合子さんが、「頂きます」をして、おにぎりをわつて見ますさ、まん中に赤い梅干が  
入つてゐます。日の丸の旗のやうです。お母さまも、おにぎりを割つて見るさ、やつぱり赤い梅干が入つて  
ゐて、日の丸の旗のやうです。それから、お父さまのも、やつぱり同じやうに日の丸の旗のやうでした。

さあ、それでは、よくかんで食べませう。

お父さまも、よくかんで、ぎつさり食べました。お母さまも、よくかんで、ぎつさり食べました。百合子  
さんも、お父さまやお母さまに負けないやうに、よくかんで、ぎつさり食べました。

そのうちに、お父さまは、お茶がほしくなりました。そら、お茶は、お水筒の中です。そのお水筒は、百  
合子さんが持つてゐましたね。それで、お父さんは、

「百合子ちゃん、お茶を下さいな。」

さう、おつしやいました。百合子さんは、びつくりして、

「はっい。」とお返事をしました。

だつて、おやく、百合子さんは、まだお水筒を肩にかけたまゝでゐたのですもの。百合子さんは、いそいでお水筒を肩からはづすに、すぐに蓋を取つて、それをお茶わんにして、お茶をついで上げました。トッピンとッピンと、上手に上手に、少しもこぼさないでつきました。

するに、お父さまは、

「ああ、おいしい、おいしい。」

さう言つて、二杯も三杯ものみました。

それを見てゐたお母さまは、ご自分ものみたくなつたのでせう。やさしい聲で、

「百合子ちゃん、お茶を下さいな。」

さう、お父さまのお真似まねをして言ひました。

百合子さんは、すぐに、

「はっい。」と、お返しをして、さつきお父さまにして上げたやうに、トッピンと、上手にお母さまに

お茶をついで上げました。

さつさつと、お母さまは、

「まあ、おかしらうか、おかしらうか。」

さう言つて、二杯も三杯もおのみになりました。

そのうちに、百合子さんも、お茶がのみたくなりました。それでは、トッピング〜ミ上手についでのみませう。

「まあ、おいしいこと、おいしいこと。」

みんな、お辨當が、すみましたら、少しの間、しつかにして休んでゐました。

それから、百合子さんは、お父さまやお母さまを、かくれんぼをして遊びました。でも、お父さまは、體が、大きいので、どこへかくれても、すぐに見つかつてしまひます。それで、お父さまは、いつも、鬼になつてばかりゐました。

それで、こんどは、鬼ごっこをして遊びました。でも、お母さまは、かけるごこが一番おそいので、すぐにかまつてしまひます。それで、お母さまは、いつも、鬼になつてばかりゐました。

そのうちに三時になりましたから、また、さつきに飯を食へたころへ坐つて、こんどはお母さまの持つて來たお菓子を、みんなで食へました。そして、お茶のみました。ああ、おいしいこと、ああ、おいしいこと。

その時、お父さまが、おつしやいました。

「ああ、もう、そろ〜歸りませう。夕やけ小やけで日がくれて、まつ暗にならないうちに歸りませう。」

すむら、お母さまもおつちやりました。

「ええ、さうしませう。ねえやま、ひいらぎ、きつひ、さびしがつてゐるでせう。」

そらく、歸るお仕度です。お父さまとお母さまは、お荷物を持ちました。百合子さんは、お水筒を肩にかけました。

さあく、いそいで歸りませう。

百合子さんは、元氣よく、すん／＼歩いて行きました。

そら、お水筒のお茶は、みんなしてのみましたね。ですから、もう、ほんたうに少ししか残つてゐません。

そのお茶が、百合子さんの歩くたびに水筒の中でゆれて、ピチャ／＼ロン／＼、ピチャ／＼ロン／＼と、それは／＼かはい／＼音をたてました。

こんごは、餘り歩かないやうに、他の電事に乗つて、お家へかへりました。

百合子さんが、

「唯今、ああ、くたびれたこと。」

さう言つて、お水筒を肩からはづして、お玄關のところに置きました。するど、お水筒の中で、お茶の音が、ピチャンとひびきました。きつ／＼、お水筒の中のお茶も、つかれたので、「ああつかれた」と言つたのでせう。

はい、それでは、この百合子さんの遠足のお話は、これでおしまひです。

# 時局の映ずる保育の二三

及川 ふみ

この第二期の保育期がはじまつた時、これから毎日幼児を遊ぶのに、時局がぎんなに幼児たちに反映してゐるか、又自分たちが、この際幼児たちにぎんなに處すべきであるか云ふ事は、おそらく日本全国の幼稚園の先生たちのあたまに浮んだ事であつたのである。

夏やすみの中にお父さん、或はお兄さん、或は親類の叔父さん、近所の叔父さん方を北支に、上海に歡送した幼児たちは、幼稚園がはじまつたその日からの遊びは全く戦争にちなんだことばかりでつくされた。

砂場の塹壕、積木の高射砲、女の幼児たちの赤十字隊など、よく實感をあらはしながら遊ぶのには驚く外はない。ラヂオに、新聞に、畫報に、映畫に、支那の各地戰線における皇軍勇將士の奮闘の實況を小さいながらも見聞してゐるのである。時局の遊びはするものゝ、毎日毎日楽しく遊ぶ幼児たちの姿を眺めるにつけても、日本國民としてのありがたさを感じみこ考へさせられるばかりである。

我が附屬幼稚園でも皇軍の上、武運長久をいのりつゝ、毎朝幼児たちが交代で、園庭に高く國旗を掲揚する事になつた。

時局をうつす保育の二三について

## 自由畫にあらはれた戦

砂場の塹壕つくりにおこらず、自由畫には、爆撃機、戦車、高射砲、皇軍占據の萬歳の様子などの材料が多く畫かれるのであるが、近頃ではこれが斷片的のものにとどまらずニュース映畫遊びもなつたのである。模造紙を細長くつなぎ合せて、皇軍故國出發の光景より上陸、砲撃、爆撃、占據、萬歳などいくつかの場面をかき、保育室の一隅に陣きつて觀覽席をつくり、入場券を賣つて遊んで居る。面白い事にはみせる畫がおしまひになるまで、一時お客はお庭に出て、次の畫が出来るまで遊んで居る。數人の映畫作製者は急ぎ材料をかく。出來上るまで無器用に、糊ではり合せて仕上をする。大急ぎで觀客を呼び集めるさういふ風である。

この映畫遊びも一人一人皆が映畫をかく事が出来るやうになるまで進みたいものである。

## 時局ばなし 二つ

ラヂオ、新聞、雜誌、などで傳へられる戦場の美談佳話は數しれずあるのであるが、幼児によくわかるやうなもので、話して見てよろこんできたもの二つ

一、日本の海軍の飛行機が五臺揃つて支那のまち南京へ爆撃にゆきました。五臺の飛行機は敵に見つからない様に高い高い空を飛んでゆきました。その時は空には雲が澤山にあつて、下はよく見えないやうな時であつたのです。支那の方では雲が澤山にあるので日本飛行機が自分の町の高い上にきかゝつてゐるのに氣がつかない様でありました。

日本の飛行機は、南京の近くにきてゐるのに敵の方で氣づかないやうなので、これはよい鹽梅さばかり、急に飛行機を下におろしてさびました。そして大急ぎで南京の町を爆撃をする用意にこりかゝりました。丁度その時、急に雲の間から敵

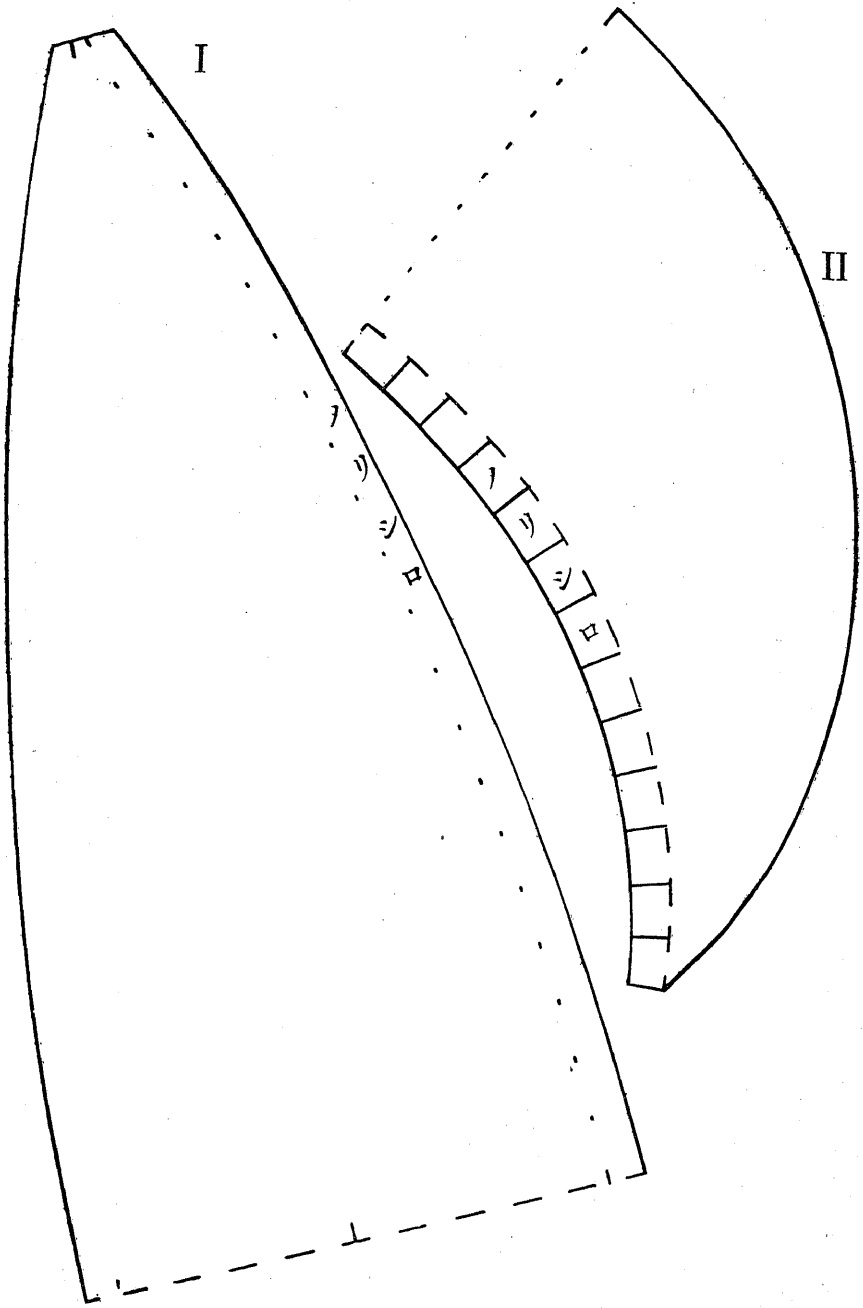


の飛行機がブーンとあらはれてきて、機關銃をうち出しました。空中戦がはじまりました。敵の飛行機をうちながら、南京の町の飛行場や格納庫に爆撃弾を投下しました。ドンドン、バンバンと物凄い音がしたかと思ふに、下から白い煙が立つてうまく爆撃が出来たやうであります。物すごい空中戦や爆撃下のうちに日本の五臺の飛行機は、一臺づつはなれはなれになつてゐました。そのうち日本の一臺の飛行機に敵弾が一發あたりました。さあそこへあたつたかと思ふに弾丸は飛行機をつばさを少しやぶいただけでありました。又敵弾が一發あたりました。こんどはエンジンに故障が出来ました。そして今までの様にさんく飛ばなくなつてきました。のつてゐた水兵さんは一生懸命に故障をなほしました。やつと少しよくなつてミベるやうになりました。又故障のため飛行機はさんく下へおりてゆきます。下は敵の陣地です。下へおりては大變です。故障をなほしながら又少し上へ飛べるやうになりました。隊長は、「海の方へミベ、海の方へミベ」を號令しました。海には日本の軍艦が澤山ゐて安心だからです。水兵さんはこわれた機械を直し直し喜んでいつてやつと白い海が見え出しました。大喜びで海の上に低くおりてゆきました。海の上には船が見えました。日本の船だ大喜びで近づくさするさ船のしるしはイギリスの國旗です。この船の方でも日本の飛行機が降りて来るのでこれを助けなければならぬとミポートを下しました。ミところが飛行機にのつてゐる水兵さんたちはおそろきました。それは何んミ、助けのイギリスのボートをこいでゐる人は敵國の支那人です。その時日本の飛行機の水兵さんたちはあゝ大變なこゝになつた、支那人がイギリスの旗をたてゝ自分たちをだました。残念なこゝだ。敵の船にのせられてはたまるものか、こゝに皆が日本刀をもつてゐる、支那人の船にのらないで切腹するのだと覺悟をすつかりきめました。ミところがだんく船が近づきますミイギリス人の船長さんが助けに来てくれてゐたのです。さうしてそこにゐる支那人は、イギリスの船にやきはれてゐる人夫だつたのです。水兵さん達はみんなうれしかつた事でせう。そこで故障のひびくなつてミベなくなつた飛行機は、おしい

けれどもそのまゝ海において水兵さんたち六人はイギリスの船に助けられてのりました。その時遠くの方に日本の軍艦が見えました。イギリスの船から信號をしました。「日本の海軍の人がこの船にのつてゐる、迎へにきてくれ」日本の軍艦からもその返事の信號がありました。まもなく日本の軍艦がきてこの水兵さんたちは無事に日本の船にかへる事が出来ました。

二、上海の戦ではだんぐに支那兵がまきました。日本軍では飛行機でピラをまきました。このピラにはこんなことがかいてあります「お前たちは日本軍に降参してくれば助けてやる。いやならむかつてこい。白旗をあげるか、戦をするかぎつちかせよ」こかいてあります。又大きなごさにも「白旗をあげて降参してくるものは助けてやる。てむかつてくるものはだんぐうつ」こかいて、支那兵の見えるところに高く立てました。又敵の大將には矢に手紙をまきつけてはすこしにしました。さあ昔なら弓の上手な人も澤山にあつたでせうが、今日日本兵の中で弓の上手な人は誰かを探しました。この時私は川西上等兵です。敵前五十米のところで立つて弓をひくのです。二人の上等兵は白鉢巻で十本の矢をもつて立ちました。そばで見てゐる日本の兵隊さんたちは萬歳々々こさけびました。矢にまきつけてある手紙には「大場鎮はかんらくした。白旗をたて、降参するか、お國へかへるか降参すれば助けてやる。さうでなければ大決戦をしよう」こかいてあるのです。はじめはこの弓をひく二人の上等兵に敵兵は澤山に機關銃をあげせかけましたが、いくらうつてもびくさもしませんので、敵もおそろいて銃をうつ事をやめてたゞ見てゐました。

一本二本三本四本こ次々さうつて、十本も無事に敵陣へ矢をうちこみました。矢は皆敵の陣地へうまくまいた



見え、だんくんに降参してくる支那兵が多くなりました。

### 戦争ごつこの戦闘帽

戦争ごつこの帽子ミしてハトロン紙で戦闘帽をつくつてみました。幼児は喜んで毎日毎日その帽子をかぶつて遊んでゐます。自分の帽子は鐵兜ミして背にせおひ、紙の戦闘帽をかぶつて軍國の小勇士らしい幼児の姿が見られます。

型紙 I を點線のところは輪にして切る。つまりこの型紙を縦に二倍にのばしたものを畫用紙でつくる。

茶色のハトロン紙(比較的上質のものがよい)にこの形を八枚きる。

長く點點のあるノリシロを四枚重ねてこれに糊をつけ、糊のつかないあごの四枚のうち一枚ミ先きに糊をつけた一枚ミはり合せ、形紙を二枚づゝはり合せたものを四組つくる。

はり合せた糊がすっかり乾いた後、はり合せた二枚ミも縦に二つに折る。即ち二つの形を糊ではり合せ、それを兩方ミも又縦に二つにおつたものを四つに、前のノリシロ同様に糊をつけて一組ミ一組ミはり合せ、それに三つ目をはり、次に四つ目をはつてはじめのミこころにつける。

つまり細長い風船が出来るわけである。充分糊が乾いた後、擴げて圓くしてこれを二つ折にして半圓にする。二重の帽子ミなるのであるが、外側だけの口に小さい圓形にきつた紙をあてゝ口をふさぐ。内側はそのまゝでよい。

次に型紙 II も點線のミこころは輪にして型をきる、これが帽子の底ミなる、これも切りこみのあるノリシロのミこころは一枚でよいが、全體は二枚はり合せた方がしつかりしてよい。顎紐は幅三センチ位のもの三つおりにし、長さ四十センチミして一方は糊ではりつけ、一方は紐の幅よりやゝ廣く、一センチ位間隔をおいて二ヶ所に切り目を入れてそれ

に通し、かぶるききにはゆるくし、かぶつてしまへば紐をしめる様にする。

色の模造紙で星形をきらせて前にはりつける。

この帽子のつくり方は、今夏文部省の講習の際につくつた紙風船のつくり方と同様の方法である。

## 膳真規子先生の長逝

鎌倉に御静養中であつた膳真規子先生は、去る十月廿二日、遂に御長逝になりました。

故人が我國幼稚園界の元老として重きをなされ、多くの貢獻をなされたことは更めて申すまでもありませんが、御退職後も、七十四歳の御高齢まで、幼稚園の事に就て非常なる關心を持つてお出でになつたこの耆宿を失ひました事は、返す返すも残念に存じます。

追つて御本葬は大阪に於て執行されます由に承つて居ります。

(編輯部)

選外佳作の四

蝶々のくびかざり

高 桑 博 子

雨がやんで、白い雲の間からは青い〜お空が見え出しました。

お日様もニコ〜照り始めました。

ここから来たのでせう、黄色い可愛い蝶々の子供が一匹、お空をひら〜面白さうに飛んで参りました。

この春生れたばかりの小さい黄色い蝶々の子供はここへ行つてもめづらしいものばかりでした。野原には、むらさきすみれがやさしくお首をふつて居りましたし、つくしん坊の兵隊さんは丁度氣をつけをして居りました。

菜の花畑には、きいろい菜の花がたくさん〜ゆらり〜しづかにゆれて居りました。



蝶々はさてもびつくりしてしまいました。

今度は上手に取りませう。そして赤くく光つたつゆの玉にそつちお手々をのばしました。玉は今度もひきりずにコロコロとツミころががつて来てお胸にバチーンとぶつかつてきこかへ行つてしまいました。

「おや〜」蝶々は又びつくりして、お目々を丸くしました。

「蝶々さん、きいろい蝶々の子供さん」

その時、きこか高い〜所から誰か呼んだやうな気がしました。蝶々の子供はすぐに、

「はあい、私を呼んだのはあなた？ きこかにいらつしやるの？」大きなお聲で言いました。

「私はね、お日様なんですよー」

「あ、お日様」

蝶々の子供はうれしそうにお空を見上げました。お日様は蝶々も菜の花も葉つばのつゆもみんな明るく照らしながら、ニコ〜笑つていらつしやいました。

「なあに、お日様」

蝶々は又大きなお聲で言いました。

「蝶々さん、きれいな首かざり私にも見せてちょうだいな。」



「いゝえ、お日様私まだ首かざり出来ないんですよ。」

蝶々の子供は、少し悲しげなお顔をしました。するさお日様は前よりもつき〜ニコニコ照らしながら。

「まあ蝶々さん、あなたのお胸に光つてるきれいなおかざりが見えませんか。」

「え？」

蝶々の子供は大いそぎでお胸を見ます。まあ本當に、蝶々のやはらかなお胸には、いつのまにか、小さなく〜つゆの玉が、たくさん〜ついで、キラ〜〜〜それは〜きれいに光つて居りました。

「なんてきれいなんでせう、誰がこんなにきれいにして下さつたのかしら。」

蝶々の子供は不思議でたまりません

「ね、お日様、あなたは御存じ？」

「え、知つて居ますとも、つゆの玉ですよ、あなたのお手々も、お體も小さくつて、重いつゆの玉が持てないから、コロ〜ツツころがつて来て、パチーンとお胸にぶつかつて、こんなた小ざ〜〜なつてお胸につらてあげたのですよ。」

「まあさう、つゆの玉さん、さうもありがたう」蝶々の子供はうれしげにおじぎをして、又

ひら／＼／＼／＼と飛び始めました。

蝶々がうすいおはねをひら／＼動かす度に、お胸についた小さいつゆの玉は、キラ／＼とそれ／＼きれいに光りました。

(をばり)

## 選外佳作の五

### かたつむりさん

宮 田 國 子

かたつむりさんの住んでゐる木の近所に、蝶々さんも、玉蟲さんも、てんとう蟲も住んで居ました。かたつむりさんは背中に何時もお家を背負つて居ますので、歩くのが大變のろく、又面倒でした。それで大抵の時はお家の中で一人で遊んで居ました。

蝶々さんや、玉蟲さんや、てんとう蟲さんには、みんなきれいなお羽がありましたので、三人はお天氣のいゝ日は何時もあちらこちらを飛びまはつて面白く遊んで居ました。そして三人は時々かたつむりさんのお家へ来ては、いろ／＼な面白いお話をしてあげました。二三日前も

三人があそびに来て、蝶々さんはきれいなお花蟲で美味しい蜜を澤山吸つて、お友達の蝶々さんミダンスをして遊んだ時のまても楽しかつたこみや、折角疲れて休んでゐるのにいたづらな坊ちやんが来て蝶々さんをつかまうとした時のこわかつた事等を話しました。

玉蟲さんは親類の伯母様のところへ遊びに行つて大變御馳走になつてうれしかつた時のこまをお話しました。又てんたう蟲さんは、お母様ミ、ばらの花のまてもきれいに澤山咲いてゐる垣にお花見に行つて、働き者の蟻さん達が、大勢並んで踊つてゐるのを見て随分面白かつた事を話して行きました。

かたつむりさんは三人のこんな面白さうなお話を聞く度に、羽のある蝶々さんや、玉蟲さんやてんたう蟲さんは何處へでも自分の行きたい所へ直ぐに喜んで行かれていゝなあま羨しく思ひました。

今日も大變いゝお天気でしたので、蝶々さん達は一番上等のまてもきれいな着物を着て、かたつむりさんの所へやつて來ました。

『今日は、かたつむりさんいゝお天気ですねえ、私達こんないゝお天気の日にお家にはかり居てもつまらないから、何處かへ遊びに行かうと思つてお誘ひに來ましたの、あなたもおうちにばかり居ないで少しは外へ出てお遊びなさいよ、外は随分いゝ氣持よ。』

『え、でも私あまり今日の様にお天氣がいゝ何だかまぶしくて、外へ出られないの。』  
『そう、ぢや又かへつたらいろいろお話してあげませうね。さようなら、行つて参ります。』  
『さようなら』

三人はさても楽しさうに何處かへ飛んで行つてしまひました。

かたつむりさんは、『お天氣がよすぎてつまらないなあ』と一人言をいひながら葉蔭の方へ行きました。しばらくするに何だかお空が變になつて來て、ぱらぱらと急に雨が降り出ししました。夕立が來たのです。かたつむりさんは大喜びでお家から出てそろそろお散歩に出かけるお支度を始めました。そのうち雨はだん／＼小やみになつて來ましたので、見はらしのいゝ木枝の方へ行きました。するにむかふの方のお空にきれいなく／＼なものが見えました。

かたつむりさんは一體何を見たのでせう。

それは虹の橋を見たのです。かたつむりさんは大變うれしくなつて『まあ何てきれいなのでせう』と思はずいひました。そして、早く蝶々さん達があそびに來ればいゝなあ、そしたら今日のこのすばらしい虹の橋のことをお話してあげるのにと思ひました。

## 選外佳作の六

# ふしぎな卵

K · S

ある山のふもとに、一軒の小さなお家があつて、元氣でやさしいおぢいさんご、可愛らしい女の子が住んでゐました。

女の子のお名前は、みいちゃん。よくおぢいさんのお手傳ひが出来ました。お庭もはきますし、おぢいさんが畠からこつて来たお大根を洗ふごも出来ました。

ある日、おぢいさんは、町へ買物に出て、おまなくお留守居をしてゐるみいちゃんにまつかなどロードの足袋を買ひました。もうそろそろ寒くなる時で、お庭に白い霜がおりる朝もありましたから、みいちゃんのおんよも冷たかつたでせう。赤いたあだが、みいちゃんのおんよをあつたかくする様に。それはほんごによいお土産でした。

みいちゃんは喜んでその足袋をはいて遊びました。お使ひにもはいて行きました。

ある暖かい、お天氣のよい日に、みいちゃんは、その赤い足袋を、お洗濯しました。そして、おひさまのよくあたるお窓の外に下げて干しました。一日中、おひさまは、赤い足袋をあたまめました。そしてその晩、一匹の雀が、その赤いたびの中に巢をこしらへてしまひました。

次の朝、みいちゃんが足袋をはかうこしてお窓の處へ取りに來ますと、片方の足袋の中に何か這入つてゐる様です。

「オヤ？」 「チュツチュツチュツ」

「ナンデセウ」 「チュツチュツチュツ」

お窓にのつて、すつこ背のびをして中をのぞきました。

「まあ雀さんよ」「卵を生んだのね可愛い可愛い卵」

「おぢいさん！ おぢいさん！ 私の赤いたあだが、雀さんのお家になつてしまひましたよ。」  
みいちゃんは、足袋をそのまま、すつこして置くにしました。その朝も霜がおりて、寒かつたのですけれど、足がつめたいのなほ我慢して居様とみいちゃんは思ひました。そして、それから毎日、みいちゃんは、お米を持つて行つては中に入れてやりました。雀は元氣になり、みいちゃんはすつかり雀と仲よしになりました。

ある朝、いつもの様に、お米を持つて行つて、赤い足袋の中をのぞきますと、いつの間にな

ヨナラしてしまつたのでせう、雀の姿が見えません。そして卵が二つミ、何かお手紙が這入つてゐました。そのお手紙には、こんなことが書いてありました。

ミイチヤン、アリガトウ。オレイニコノタマゴ　ヲ　アゲマス。コノタマゴヲタベテ、ホツベタ　ヲ　ミツツ　オタタキナサイ。ドコヘデモ、スキナトコロヘトンデユケマス。ミイチヤンノ　イチバンダイジナ　イチバンスキナモノ　ガ　ミツカルマデ　トキドキ　タマゴ　ヲ　アゲマス。

それで、みいちやんは、その朝、早速卵を一つ御飯にかけて食べました。あの雀さんの處へ行つて見たいなご思ひながら、ミても美味し卵いでした。あゝそうく頬を三つ叩くのでしたね。みいちやんがその通りしますミ、みいちやんのおからだが急にすうつミ軽くなりました。そしてフワくくくミお空の方へ飛び出しました。飛行機よりも、飛行船よりも、氣持よく、愉快な様に思はれました。ミ急に下の方が賑やかになりました。

ホーホケキヨ　ピーチクピーチク

チュツチュツチュツ　テツペンカケタカ　テツペンカケタカ　ボッボッボ

みいちやんは小鳥の國へ來たのでした。そこには、この間の雀もゐて、大喜びで色々美味しい山の果物や木の實の御馳走をしてくれたり、小鳥の合唱やおごりを見せてくれたりしました。

あまり面白くて、お家へ歸るのも忘れてしまひました。

おぢいさんは、みいちやんが、何時迄も歸つて來ませんので少し心配になりました。

私もひみつ行つて見ませう。ミ残つてゐたひみつの卵を食べました。けれどもおぢいさんは頬ぺたを叩くのを忘れましたのでちつとも飛べません。ピョン／＼自分でミび上つて見ますけれど駄目です。仕方がないので、お馬に乗つて行くことにしました。

おぢいさんは、大切にして置いた鈴をふたつお馬の頸につけて、チリンチリン バカツ バカツ チリンチリン バカツバカツ ミお山へ出掛けて參りました。みいちやんは、この鈴が大好きでしたので、直ぐにこの音を聞きつけて、おぢいさんがお迎へに來たことを知りました。

おぢいさんも小鳥の國で面白く遊びました。歸りには、みいちやんも、おぢいさんも、お馬も卵を食べました。頬ぺたを三つたゞくのを忘れませんでしたから、みんなフワ／＼ミお空を飛んで、直ぐにお家へ歸るこゝが出来ました。

次の日 又足袋の中に卵がひみつ這入つてゐました。みいちやんは、お菓子の國へ行つて見たいな、ミ思ひながら食べました。ほつぺたを三つたゞきました。

フワ／＼昨日より少し長くミびました。まあ、まあ、今度はお菓子の國へ來ました。お菓も、木も、草も、みんなみんなお菓子、きれいな女の人が立つてゐて、お籠にいつばいお菓



子を入れたのをみいちやんに下さいました。

次の日は、玩具の國へ喜んで行つたり、ゑ本の國へ飛んで行つたりしました。

でも、お菓子よりも、おもちゃよりも、何よりもみいちやんの大好きな大切なものがありました。

「お父さまとお母さまの處へ行きたいな」と思つて食べた卵は、今迄で一番おいしい味がしました。そしてみいちちゃんのお身は、空の上へ高くくぐりあがりました。

フワフワフワ。まあよい香ひがします。一面の花園、そして、きれいなきれいな音楽、

お話に聞いた神様のお國に來たのでせうかしら。

そこで、みいちちゃんは、ミウ〜お父様とお母様にお會ひしました。

大好きな大好きなお父様。

大事な大事なお母様。

おぢいさんも、きつこ卵をたべて、あきらから喜んでいらつしやるでせう。今度は頬を三つ叩くのを忘れないで！。

(をはり)

選外佳作の七

メダカの坊や

小原 すみ子

白い雲が、たんぼの小川にチラ／＼うつつて今日もい／＼お天気です。

チヨロ／＼小川の石のかげで、二三日前にメダカの坊やが三匹生れました。きつ／＼可愛い、赤らやんだつたでせうね。

お天氣がい／＼ので三匹の坊や達はお父さん／＼お母さんに連れられて、泳ぎのおけいこに石のかげから出て來ました。

「おや！随分明るいんだなあ」

「／＼つても廣いんだね」

「僕なんだか恐い様な氣がする」

三匹の坊や達は生れてはじめて見るものばかりなので、本當にびつくりしてしまいました。

「あれ何？お父さん」

「きれい あれかい あれは麥だよ」

「ムギつて？」

「人間の食べるものなんだよ」

「ニンゲンつてなに？」

「おや／＼お前たちは生れて来たばかりで、何んにも知らないんだな。人間つてヒトの事だよ、さうだね、今にきつて／＼へやつて来るから待つておいで、教へてあげるからね」

「お母さん、お母さん あら／＼あんなきれいな」

「あれはねレンゲ草つて云ふの、きれいでせう、人間の子供が大好きでよく取りに来るんですよ」

「僕人間の子供つて早くみたいなあ」

そんな事を云つてゐるこ向ふの土の中から頭の大きな、くろんぼのオタマジャクシがチヨロ／＼やつて来ましたので、坊や達はびつくりしてお父さんとお母さんの後の方へかくれてしまひました。

「やあ、メダかのおぢさんおばさん今日は」

「おや、今日は、オタマジャクシさん」

「おばさん可愛い、赤ちゃんですね。僕お友達が出来てうれしいな。ね、君たち僕をこれから遊ばせうね」

「オタマジャクシさんですよ、これから仲よしくなっていたよ」

お母さんにさう云はれても、まだ坊や達は少しばかりこはくてお父さんにしつかりつかまつてゐました。

オタマジャクシさんは急ぎの御用があるからさう云つてさよならして行つてしまひました。

「さあ泳ぎのおけいこだよ、一度お父さんの泳ぐのを見てゐてごらん、ほら、スーッくく、こんな風に身體を動かして」

「僕恐いなあ」

「だめくそんな弱蟲ぢやメダカの兵隊さんにはなれませんか」

「メダカのお國にも兵隊さんゐるのよ可愛い、兵隊さんね」

メダカの坊やたちもやつぱり兵隊さんになりたくて、一生懸命泳ぎのおけいこをしてゐました。

「恐いよおーく お母さん」

「どうしたの？　あら、まあカニのおぢさんぢやありませんか、おぢさん今日は」

「やあ、お天気ですね、ほおこれは可愛い子供たちおぢさんを見てびつくりしたの？

「ハハハハ」

「さあ、カニのおぢさんに御挨拶なさい、みんな」

「おぢさん今日は」

「おぢさん今日は」

「おぢさん今日は」

カニのおぢさんは、まるいお目々をぐつこいばして、大きなハサミでメダカの坊や達の頭をなせる様にしながら

「本當にお利巧さんですね、おぢさんの所へもうんご遊びにゐらつしやい。おぢさんのお家は  
すぐそこだから」

「はい、ううもありがたう」

「おぢさん、おぢさんの持つてるものなあにそれ」

「これかいこれはハサミだよ」

「ハサミつて何かはさむの？」

「さうだよ、おいしい御馳走をはさんだり悪いものがやつて来た時このハサミでチョン切つてしまふのだ」

「おぢさん、いゝもの持つてるんだなあ」

「人間のお國の兵隊さんが鐵砲を持つてる様に、このハサミもおぢさんの鐵砲なんだよ」

「ねえお父さん、僕達にさうしてないの？」

「僕もおぢさんみたいのほしいなあ」

メダカの坊や達はうちやましさうに云ひましたが、カニのおぢさんは手をかづつて、

「いや〜坊や達にこのハサミはいらないよ、みんなはそんないゝ身體を持つてるのだからね、それでしつかり泳ぎのけいこさへすれば、こんなものはかへつて邪魔つけだよ」

「おつして〜」

「おぢさんは恐いものが来てもみんなの様にスーッ〜と早く泳げないからね」

カニのおぢさんはチョット悲しさうな顔をしてさう云ひました。

メダカの坊や達はおぢさんの話をきいて、もうハサミをほしいとは思ひませんでした。

お日様が、丁度、たんぼの真上でこの小さな流れの中のメダカ達をのぞき込んでゐらつしやる頃は、メダカの坊や達は随分泳ぐのが上手になつて、お父さんお母さんミオニゴッコをはじめ

めてみました。

「ジャンケンポン」

「ジャンケンポン」

「あら、お母さんのオニだよ」

「そらにげよう」

メダカの坊や達はごつても早くつて、チヨロチヨロくくくにげまはるので、メダカのお母さんは、何時までたつてもつかまへられなくて困つてしまひました。でも子供達の泳ぐのが随分上手になつたので、本當はうれしかつたのです。

あら！坊や達は何時の間にかみえなくなつてしまひました、きつと近くの草のかげにでもかくれてお母さんをおごろかさうとしてゐるのでせう。

お母さんメダカは、「ほつ」「こ一息ついてから、坊や達をみつつけ様こそうつと泳ぎ出しました。

丁度其の時

「ボチャーン!!」

と大きな音を立て、この小川の中にこび込んだものがあります。

「うわー地震だあー」

「お母さーん」

「お父さーん」

坊や達はオニになつたお母さんをびつくりさせようと思つてゐたのに、今の大きな音でかへつてびつくりして草のかげや石のかげから、かけ出して來ました。

その時ポツカリ水の中からお顔を出したのは………

「なーんだ蛙さんだつたのよ」

「おやく／＼びつくりさせてごめんなさい。あんまり暑いもんだから一泳ぎしやうと思つてび込んだら、坊ちゃん達をびつくりさせてしまつて、ほんこに悪かつたね」

メダカの坊や達があんまりびつくりばかりしてゐるものだから、お父さんもお母さんもおなかをかゝへて笑つてゐます。

「だつて僕、ほんこにおぎろいたよ、随分大きくゆれたんだもの」

「僕だつておぎろいたよ」

「僕も」

蛙のおぢさんは「暑／＼」と云ひながら上手に泳いでゆきました。

「蛙のおぢさんつて、なんだか強さうね、お父さん」



「さうだよ、この小川の中では殿様トクサマになるのは蛙さんばかりだからね」

「僕達食べられやしない？」

「うゝん大丈夫だよ、この小川に住んでゐるものはみんな仲よしなんだから、決してそんな心配はいらないよ」

メダカの坊や達はお父さんにさう云はれてほんまに安心しました。

「でもこのお國には随分色んなおぢさん達ゐるんだなあ」

なんだかメダカの坊や達はもつ／＼色んな珍しいものをみたい様な氣がしました。でも又それを見る事は恐い様な氣もしました。

「さあお家へかへつて少し休ませよう」

お母さんメダカがおつしやいました。

「僕おなかとすいちやつた」

「僕も」

「僕も」

メダカさん達あんまりびつくりばかりしておなかとすいちやつたんですつて。

今朝はお父さんとお母さんの後からおつかなびつくりついて來たのに、歸りはもうこんなに

元氣でスーッと走つてしまひました。

あら／＼あんなに遠くまで泳いで行つて、

「お父さアーン

お母さアーン

早くゐらつしやいよぎー」

なんて呼んでゐます。

お父さんとお母さんは、仲よく竝んで泳いでゆく三匹の坊や達をみて、「早く立派な兵隊さんになればいゝなあ」と思ひました。

(をほり)

# 田舎の子供

常 石 貞

朝露をふくむ茄子畑の間を通つて、今日も卵を末吉さんの家まで買ひに行く。

朝霧につままれた土藏がぼうさかすんで牛小屋はもう綺麗に掃除されてあつた。鶏舎のそばの瓦屋根の家がそれなのだ。末さんが働き者なので、父時代の借金も返し土藏までたてる程になつたのだが、支那事變突發以來、働手の末さんが召しに應じ出征して今では老母と若い妻君が五つを頭に三人の子と共に家を守つてゐる。朝六時といふのにもう、おかみさんは田へ出て、子供三人を守る婆さんばかりであつた。広い板間にござをひいて、三人の子供が朝飯を喰へてゐる。「お許しなして」私は、わざと地方訛りでつて土間に入つた。

三人の子は一齊にこちらをむいた。味噌汁をかけた飯粒

を口のまわりに一ぱいつけて。昨年十月に生れたばかりだといふ男の子が、味噌汁をかけた御飯をたべてゐるのに驚いた私は、暫く二歳の此の兒をあやしてゐた。上の五つの子ちやんはもう御飯もすまして、たうもろこしをかじりながら田甫へ出た。土間に腰をかけて、百合やたうもろこしの葉かげから子供の後姿をぼんやりながめてゐた。

「やあ金ちやんが来た」「金の一錢銅貨が来た」三人のわんぱく小僧が、炒つたそら豆の皮をまきちらしながらやつて来た。中に國藏さんの所の芳ちやんもゐる。六つ七つの就學前の幼児であらうが、我兒なまゝは比較にもならぬ手足のがつちりした兒ばかりである。

「金ちんの一錢銅貨で、飴買つて、喰へるこえゝなあ。」  
 ミ芳ちやんがおきけて云ふに、金ちやんは急いで我が後頭

部に手をやつて、はげをかくした。それをみた他の兒はわつみ笑つた。そして、口々に「金ちやん、君の横もはげかゝつてゐるよ、今度は前からだせ」と云ふ。金ちやんは泣きさうになつて手にもつてゐたうもろこしのたべかけを芳ちやんめがけて投げつけた。年上の芳ちやんはうまく受けまつて、それをかぢりながら「二つ、一所はげて來た」と音頭

- さる様に云ふに、他の子供も皆一緒に
- 二二つ フタコトコロ 二所はげて來た
  - 三三つ ミトコロ 三所はげて來た
  - 四四つ ヨコヨコ 横まではげて來た
  - 五五つ イッ 五所はげて來た
  - 六六つ ムクムク むくむくはげて來た
  - 七七つ ナナ なかなかほらない
  - 八八つ ヤカン やかんになりさうだ
  - 九九つ コノコノ ころまではげて來た
  - 十十つ トウ とうとう大やかん

さふしをつけ面白さうにからかつてゐる。

誰が教へたか覺えたか知らぬが、他の兒の缺點をあげて

はやす等さいふ事は、幼稚園教育をうけてゐる幼兒にはみられぬ事と思つた。

私は大人氣もなくむつこして、懐にしのばせたキャラメルを金ちやんの手に握らせた。それをみた子供等はわつみはやして、

はげをちよつこみて毛がない候

蠅がこまつて すべつて 候

こ手をたゝいて、憎さげに云ふ。何か云はうこした時「卵が又あがりまして大粒は一つ四錢だす。お氣の毒やけ」と鶏舎から婆さんが、卵をもつて出て來た。私は六つ卵を受取つて、籠に入れ二十四錢を婆さんの手に渡した。婆さんは、おそろおそろ「何か變つた事でも出て居りますまいか」ときいた。こゝらの農家では忙しいので平素新聞をこららない。年末より四月までの農閑期の外はよまないのである。

私は胸があつくなつた。今日の新聞はまだみないけれど、昨日の新聞には戦死戦傷の人々の中には息子さんの名はなかつた。何か變つた事があれば留守宅には一番先に知らせて來る筈だといふ事をはなして、息子さんから便りなく

も勇ましく働いて居られるのだらう等々、婆さんご話をし  
てゐるに「わつ」ミ金ちゃん泣く聲がした。私は婆さんよ  
り先へ、飛び出した。

金ちゃんはキャラメルをさられてしまつたのである。紺  
がすりの肩を、ふるはせながら

「芳ちゃんが手をねぢつてキャラメルを取つた」

こいつて、婆さんの腰にかぢりつきながら泣きぢやくつ  
てゐた。結句大人が肩をもつたばかりに年上の男の子に反  
感を買つて、手をねぢられたばかりか、キャラメルも取ら  
れてしまつた。

「金ちゃんごめんなさいね」私は心の中で餘計な事をした  
さ後悔をした。

末さんは我子のいぢめられてゐるのも知らず第一線にた  
つて奮闘してゐるだらう。おかみさんはつかれた腰をのば  
し、田の中にうつる我が面影が、遠い戦地の我がつまに、  
せめて夢にも通へかしませつない女心をつゝんで、又せつ  
せき働いてゐるだらう。卵の籠をさげて考へながら歩いて  
ゐるに、目の先に目のくりくした、きかん坊の芳ちゃん

が、あらはれた。

「がんばりのおやぢになぐられて」ミ「歡呼の聲におくられ  
て」こいふ歌をもぢつてうたつてゐる。私は思はず可笑し  
くなつたに、同時にこの利口な兒を適當な環境の許におけ  
ばすぐれた智能を有するやさしい兒に、なるのではないか  
と思つた。私は今までの「憎らしい兒」こいふ感がすっかり  
消えて、急いで、畑の枝豆を一束ぬいて芳ちゃんにもたせ  
ながら、「芳ちゃん、金ちゃんミなかよく遊んで頂戴ね」こ  
いつた。我が畑であつたから。（昭和十二年八月一日の朝）

## 新刊 日本国旗 日の丸の旗

倉橋先生作詞、小松先生作曲、戸倉先生振付の、三拍子揃  
つた「日本の旗 日の丸の旗」の樂譜が、この程出版になりま  
した。時局柄、子供に歌はせ踊らせたいものゝ一つでござい  
ます。私共は朝、國旗を掲げる時にも歌ひ、遊戯にも最初に  
歌ひそして踊つて、時局を心にしのばせて居ります。  
廣く家庭にも行き互るやうにどの心組から、表紙は幼兒の  
喜びさうな繪を綺麗な色刷りにしてございませう。賣上の金額  
は全部國防費として獻金致す事になつて居ります。  
皆様の幼稚園だけでなく、各御家庭へもご吹聴願へればこ  
の上もなく嬉しく存じます。

（附屬幼稚園 係り）

# 幼兒教育の文化性 三

— 講習筆記 —

倉橋 惣三

## 目次

- 第一 序論
- 第二 道徳教育
- 第三 宗教教育
- 第四 藝術教育

その要素に就きまして第一の問題——この第一の問題は、大層考へ方の違つた意見が成立して來るのでありまして、要素が幾つもありますが、その要素の一つを此所に問題にする。その一つが、色々の非常に相反した様な意見が出て來る由來來歴を持つて居る要素であります。或考へ方では、宗教的生活態度に發達する一番根本の要素は恐怖である、斯う云

ふ考へ方であります。この恐怖ミ云ふ考へ方——總ての宗教は恐怖に發するミ斯う云ふ考へ方。これに對しまして私共の取つて居ります見解は、恐怖ミは大變に性質の違つて居ります所の、感謝ミ云ふ言葉を用ひて來るのであります。

一、感謝。そこで、感謝ミ云ふのを、宗教心の最も主なる要素ミ私は考へる。その感謝ミ云ふ代りに恐怖ミ云ふ事を言ふ説が強くあるのであります。そこで説明の爲に、並べて考へて見た方がいゝと思ふのであります。恐怖ミ云ふ考は、これは多くの宗教の中に確かにある事であります。殊に宗教のものであるミ解釋されて居ります自然宗教、自然界宗教、宗教的な感じを持つ本當の宗教は、さう云ふものでは御座いますまいか。人類の始めて持ちました宗教ミ云ふものは、さう云ふ傾向を持つて居るので、その自然宗教ミ云ふものに就て考へて見ますミ、そこには恐怖ミ云ふ様な事が非常に大きな要素をなして居るらしく思はれます。例へば雷様を怖れる、或は大きな海を怖れる、大きな強い風を怖れる。これは、怖れるが故にそこに宗教心が、さう云ふ自然を對象ミして湧出て來るミ斯う考へられるのであります。又現に大人の生活の中に宗教的なものが起りました時に、相當に恐怖ミ云ふ要素が強く働いて居る事を、自分達も否定し難いのであります。然し乍らこの恐怖ミ云ふ事に就てよく考へて見ますミ、そこから又色々なお話を致しますが、先づ第一には、恐怖ミ云ふ云様な事で、宗教的なものが人類の發達の歴史の中に出て來ました事、これは確かであります。これを認めます。從て幼兒の心身の中にも、恐怖ミ云ふ様な意味から宗教の方になつて來る。その意味に於ての恐怖ミ云ふものが、相當意義を持つて居る事も認め得られるのであります。唯宗教そのものゝ方から見まして、宗教が段々出來て來る方ぢやなく、吾々が宗教ミ云ふものを考へる上の方から見まして、何所迄、恐怖を要素ミして、高い大きな本當の宗教が出來るだらうかミ云ふ事を考へて見る、或は本當に偉い宗教ミ云ふものには、恐怖ミ云ふ事が果してそれ程強い、殆ど唯一の様な力を持つて居るものであらうかミ云ふ事を、宗教の方から考へて見ます。子供の方には確かにさう云ふ事があり

ますし、人類の宗教の發生の中にもありますが、今日は宗教云ふ文化を問題に致して居るのでありますから、その高等なる宗教云ふものには、恐怖云ふ事がどんな風になつて居るだらうか云ふ事を考へて見るのであります。さうしまする云ふは、次の考察が出て来ると思ひます。——話が少し、色々紆餘曲折して參りますので、お眠い方は今から眼が覺めて、段々お分り下さるかと思ひますが——今度一寸話が變りまして、一體恐怖云ふ事と感謝云ふ事は、人間の心理としてさう云ふ關係のものであらうか。恐れる云ふ事と有難い云ふ事は、一體さう云ふ關係のものなんであらうか。斯う云ふ事を先に一つ考へて見る必要があります。

一寸考へますならば、恐れる云ふ事と有難い云ふ事は、これは全く別の事に相違ありませぬ。夜、道を歩いて追刺が出る、恐ろしい、さう考へても感謝なん云ふ事にはなりません。(笑聲) 向ふから熊が出る来る。食ひ殺される、これも純粹なる恐怖であります。即ち恐怖云ふものゝ心理的特質は、本能に基くものでありますから、その本能の意味に於ての恐怖云ふ事は、感謝云ふ事と全く關係のない問題になります。

然し乍ら、茲に斯う云ふ事が考へられるのであります。恐怖の場合も感謝の場合も、心理的に調べて見ますと共通なるものぢやないか、共通なる性質がその中に發見されます。恐怖と感謝が同じものだ云ふのではありませぬけれども、そこに共通なるものがあるのであります。そこでその共通なるものを、何だらうか調べて見ますと、自分云ふものを小さく感じて居る言ひますか、自分を縮小して居る言ひますか……それが共通なる點であります。あゝびつくりした、膽つ玉が縮つた、膽つ玉許りではないのであります、體そのものが縮まるのであります。「何、怖いものか」威丈高になりませんが、側に寄つて見る足がブル／＼震へて居るのであります。恐怖の時に教育が擴大するなん云ふ事は考へられない。恐れゝば恐れる程大になるなん云ふ事はありませぬ。



感謝云ふ事も矢つ張りさうぢやないでせうか。感謝云ふ事は、向ふの相手に對して此方が反對であつては、感謝は出来ませぬ。中にはさう云ふ人もあります。「感謝してやる」さ、えらく啖呵を切る人もありますが、然し感謝する云ふ時には小さくなる。ですから大抵の人には感謝が出来ない。結果は有難いと思つても、自己を萎縮する事が堪らんですから、くやくつて感謝が出来ないのであります。感謝すべき筈だ云ふ事は分つて居つても、くやくつて出来ないのです。何をあんな奴に感謝しなければならぬか云ふ事は非常にくやくしい。それは何所がくやくしいか云へば、自己を縮少するこゝ、そこが苦しいのであります。中にはさう云ふ事が平氣な人もありませう。けれども普通の人間心理をして、これは却々つらい事なのであります。だから感謝を餘り終始する人は、餘り高尚な人ではないと言はれます。終始感謝をして居る。下らぬ事でも何でも、さうも有難う、——橋の側の乞食——本當の心理はさうか知りませぬが、あそこ迄お辭儀すれば感謝だ。若し自己が縮少する云ふ心理そのものに就て平氣な人が感謝したから云つて、大した事ぢやありません。何でもないのである。「馬鹿にされる位の事は、私の方で降參する位の事は何でもありません。さうですか、感謝して置きますか」なんてさつさ出来る人は、さう云ふ感謝をされる方から言つたつて詰らないのであります。よくよく自己を縮少する事は嫌だが、然し感謝せざるを得ないから感謝してくれた時に、本當の感謝云ふ事になる譯でありますから、感謝云ふ事は、自己が縮少する事であります。ですから恐怖も感謝も、自己を縮少する云ふ事に於ては同じなのであります。

宗教は要するに、自我を縮少する事であります。一つ神様の所に話しに行つて交際つて來よう、なんて云ふ事はないのであります。さうもあの神様が、俺が来てくれなければ困る言ふから助けに行つてやらう、お賽錢も少し分けて貰はう云ふ、高飛車な神様の兄貴、親分云ふ形で、宗教は成立させぬ。日頃は何だと思つて居りますものでも、宗教になつ

て来れば此方が降参して居るのであります。此方が小さくなつて居るのであります。そこで、その意味に於きまして、恐怖感謝とは必ずしも全く別個の心理性ではありませぬ。心理性としては共通な所があるのであります。これを逆に申しますならば、恐怖も感謝も、相手を大きく見て居ります。それは相手を馬鹿にして、さうして感謝する云ふ事も、複雑なる人間心理の中にあります。あの野郎に感謝して置かうか云つた様な事もあります。あの御主人には本當に御恩になつたけれども、あの先代の亡くなつた後のやくざな御當主は、俺が助けてやらなければ生きて行けない奴だけれども感謝して置かうか、云つた様な事もあるのであります。けれどもこれ等は非常に複雑な事でありまして、兎に角相手云ふものを非常に大きく見て居ります。そこで、その自分を小さくする事も、相手を大きく見る事に於ても、共通な心理が、或時は感謝になり、或時は恐怖になる。これはさうから違つて来るか云ふ事が問題になつて来ます。中には、感謝云ふ心に於て、實は恐怖しかして居ない事もあります。

子供なんか、私共の側に來て感謝する。感謝する云ふけれども、心の中は純粹の恐怖に他ならぬ。何だかじろく私共を見乍ら、怖さうな顔をして、「この位感謝すれば罰を受けないかしら……」と思つて、上眼使ひに感謝する時は、實は恐怖なのであります。而も本當は感謝して居乍ら、餘りに強い感謝の形から、恐怖云つた様な事にしか意識されない事もあります。神様等にはさう云ふ氣持が始終あるのであります。随分神様云つた様な好い人がありまして、一寸立寄つたなんて着流して「お變りないか」云つて神様を拜んで来る人があります。これなき、神様云ふ非常に仲の好い方でありまして、「色々御厄介になつたが、咳が治つたのもあなたのお蔭か……」云つてお辭儀をして來るのであります。非常に深くなつて來ます。恐怖云つた方がいゝ様になる。

それが、さう云ふ時に恐怖か云ふ事は、これは分解的に考へて見る必要があると思ふのであります。これは非常に細

かい事になりますけれども次の様な話になる。

今朝皆様は色々な漬物を食べてお出でになつたであります。こゝに一つ理窟漬を差上げようと思ふのであります。理窟で漬けて見ますと、そこらの細かい味が分れて來ます。それは斯う云ふ様に言へるんぢやないかと思ふのであります。

自分云ふものを萎縮しますが、我云ふものは小さくなりますけれども、さう、謙遜と言ひますか——へり下る氣持で相手との關係に居りますけれども、然し乍ら自分云ふものが全くなくなつて了ふ言葉が足りませぬが、全くなくなつて了ふ様なその状態ぢやなくつて、我を縮めて、我云ふものを縮小させる事に於て實は最も自分云ふものが強く生きて來る場合、この場合が感謝になるのではないかと思ふのであります。恐れる云ふ方は、自分自體が萎縮するに共に全部自分がなくなつて了ふのであります。ですから恐怖の結果は氣絶して了ひます。みるみる顔が青くなつて、感張つて居つたのが段々縮んで來ます。そして氣絶して倒れつちまふ。感謝で氣絶するなんて云ふ事は滅多になからうと思ふのであります。有難さにぶつ倒れる云ふ事は滅多にない。又、そんなぢや私は感謝と言へないと思ふ。更にこれ他の言葉で言へば、感謝云ふ時には何所迄も私なら私が感謝して居なければ意味をなさぬ。誰が考へても有難い事で御座いまして、その有難さの前には私も何もあつたものぢや御座いませぬ。誰が感謝して居るか分りませぬが、唯これ感謝、云つたのでは……。

私のところに時々物を下さる方がある。——皆さんに督促する譯ぢやありませんけれども——その時に、差出人の名が書いてない云ふと、御禮の御挨拶も出來ませぬ。又、感謝の意が通りませぬ。中には誠に下らぬもので御座いますから名を書いて上げる程でない云ふ仰言る方があるかも知れませぬが、然し感謝云ふには、此方が何所迄も主にして來なければならぬ。感謝が天から降つて來たなんて云ふ事は考へられないのであります。

恐怖の方は、あゝ怖かつた、あゝ實に恐ろしかつた云ふ時に、比較を言ふものぢやありません。「俺が怖かつた」云ふ中は、そんなに怖くなかつたのです。「わたし本當に怖かつたのよ。だからわたし、扇で顔をかくしたの」云ふのは、餘程自分が残つて居るのであります。恥しい云ふ時には、その間の様なところに居りますので、恥しい時にはこの邊に斯うやつて居る（扇で顔をかくす）感謝の時にこんな事をして感謝するのは、意味が通りませぬ。感謝は、自分が感謝する。恐怖は、潰れる程、氣絶する程、自分がなくなるのであります。詰り自我の中の色々本能的な方面がなくなりまして、その人格的自我もなくなつて了ふ場合、本能的自我は縮少して、人格的自我：：自分云ふものは却つて残つて居る云ふ場合、二つに分ける。感謝は、その人格的の残つて居る場合であると思ふのであります。斯う言ふ、理窟は何方だつていゝやま皆様は或は仰言るかも知れませぬが、一體宗教經驗云ふものは、人類の歴史的發展に於きましては本能的な要素が非常に強く與つて居るものであります。さうして、自然宗教云ふ様なものに於ては、本能的な要素が非常に強かつたのであります。今日私達が本能を持つて生きて居ります限り、その意味の宗教的なる、あの野蠻人原始人がやつたと同じ意味に於て、宗教的なる性も私達にあるのでありますけれども、我々が今日宗教云ふ所の高等なる人間活動は、人格的なものでなければならぬ事は言ふ迄もないのであります。私は近來澤山世の中に起ります宗教なん云ふものが——これを、類似宗教或は疑似宗教と言ひます。——犬の道さか猫の道さか色々あります。その犬の道猫の道云つた類似宗教、斯う云ふものが何故下等なものであるか云ふ時に、私は人間性としては一應認めます。本能的の氣持から其方に行く事は充分認めますが、人格が足りないのであります。神様はさんなお辭儀をして來るものであつても、人格的に聽いてくれるのでなければ、或はその宗教が人格を養つて行くのでなければ、人格が主になつて出るか少くも人格の涵養成長に意義あるものでなければ本當の宗教とは言へないのであります。

そこで、さう云ふ意味から人格性の少い恐怖云ふ様な事で宗教を肯定して行く事は私は本當でないに感ずる。恐怖よく似て居ります。何所迄も人格的である云ふ事が特質である所の感謝云ふものを以て、宗教の一重要要素にするのは、宗教それ自身の人格性に基くからであります。唯恐れ入つて了ふ場合は人格を破壊して居るから本當の感謝と言へない云ふ事になる譯であります。

そこでその意味からしまして、感謝の方を養ふ方の事はこれはまあ暫く後のこゝに譲りますが、子供の恐怖心を高め強めて行く事に依つて、宗教的なる教養が出来る云ふ、相當親しく、相當廣く存在して居りますあの空念を、私はしつかり取り度いと思ふのであります。私は神様ぢやありませんから知りませぬけれども、私達でさへも、必ず自分の側に來る人が人格を失つて來る云ふ事に就ては、私に頼る事に依つてその人の人格がなくなつて來る云ふ事は堪へ難きものであります。況してや、神様がそんな事を望まれる筈はないのでありますから、そこであの小さい子供の心の中に出て來る恐怖を——これは實際問題でありますから、御注意頂きますが——恐怖として無暗に壓迫して了へし申すのぢやない。これは、恐怖云ふ本能性の取扱ひ方をさうするか云ふ事は別の問題で、心身の健全なる發達にも關係が出て來る事でありませんが、それは暫く別で、此所では問題を極限しまして、子供の恐怖を育てる事に依て宗教を取扱つて行かう、これは絶対に避け度いと思ふのであります。雷様が鳴る、ゴロゴロ鳴る、子供が青くなつて居る、そこでその機會に於て宗教的なるものを養はう云つた様な態度は、これは闇魔様が園長である幼稚園かなんかでやる事でありまして、他ではやらぬ方が宜しいのであります。然し斯う云ふ事はよくあります。「怖いよ、怖い」の「斯う頻りに言ふ。まあ實に澤山の恐怖が、宗教の名に利用されて居る。」「そんなこゝをさう何處で睨まれて居るか知れない。壁に耳あり障子に眼あり」。あんな事をうっかり言ふと、子供は探し廻つて、ラヂオの擴声器を耳と思ふかも知れませぬ。天井に眼がある、節穴がある、

これは實に外道であります。宗教云ふものはそんな情ないものではありません。神様なん云ふ偉い方が——私、よく知りませぬが——節穴から覗いて監督なさるなんて云ふそんなケチな事はなさらないのであります。壁に耳あり障子に眼あり云ふのは、音波が世の中になんか思つて居た昔の話で、今日は、私が斯う言つて居る音波がちやんき傳つて居ることを私、確信して居ります。私が部屋の中で話をして居る時に、サイエンスの一寸した法則で、隣ですつかり記録されることなんか何でもない。神様なんて云ふそんな問題に持つて行かなくなつて——。

幼稚園ぢや、ないでせうけれども、よく家庭なんかであるのであります。神様や佛様を祭つてある處を暗くして置いて——成可く電氣を點けないで薄暗くして置いて「そんなことをするなら来い」云引張つて行つて、佛さんの扉をあけて「ソラ」云言つて赫かす。一週間許り前に差上げたお饅頭に黴が生えてお化の様な顔をして居る。(笑聲)これは成程子供が見ればゾツとします。爾來その子の本當の人格宗教云ふものは、寧ろ抑へつけられて了ふのであります。成立しないものがあります。よく子供が言ひます。「さうも私、小さい時にお婆様に斯うされて、さうも非常に怖くて、何だか天地宇宙、實に怖い様な氣がして居た。それが宗教的私の氣分を助けた」云云子供……さう云ふ事も、人間の複雑なる心理の中には、何がさうなるか分りませぬから、正面の理窟で取扱つたからうまく行くのでなく、變則の中に本當のものが湧く事もあるから、一概には言へませぬが、若しその子供がその感性の中で、自分でも穿鑿出来ない様な問題を別にして、唯自分で自分を考へて見ましたならば、恐らくや實に馬鹿々々しくなつて來ると思ふのであります。幼児だつて既に馬鹿々々しくなつて居ります。「お前、嘘をついたやうらう。白狀しない云ふこの水天宮様のお札を吞ませる。若し嘘をついて居れば血を吐く。さあお呑み」。丁度子供は咽喉が乾いて居りまして「一緒に水もくれるか」云言つて吞まうとしたら大事件であります。今度は「吞ましちや駄目だよ々々々々々々」あれは、吞まして了つたら大人の方で心配して居る。そこは

實にうまく行つて居るのであります。水天宮様を私、説明するんぢやないんですけれども、それを吞まして、さうして神様は嘘を言つた者でも俺の手に掛つたら嘘を言つたものでない事にして下さる方なんです。私は水天宮様の護符を迷信なきゝは簡単に片付けませぬ。實にえらいものだと思ふ。水天宮様の所に連れて行けば、人間は裁判の道具にして、吞ませたり吞ませられたりしますが、神様の方では何方にしてもケロリミして居るのであります。吞みさへすれば無罪になる護符なのであります。あの護符は實にえらいものだと思ふ。

この間京都に参りまして、何處かに、蟲のおこつた子供を連れて行く神様がありました。さうして其處に教養のあるお母さんが子供を連れて行つた。さう云ふお母さんは、蟲がおこつてジリ／＼して居る子供……さう云ふ、子供に癩が起つて居る時には、親にも癩が起つて居るに違ないのであります。そこで、親子の縁が切れる様な凄まじき事になつて居る。それを、バスに乗り電車に乗り、京の町外れ、お駕籠に乗つてなだらかな斜面を通つて森に行つて、半日人里離れた處で親子で會つて居れば、先づ親の癩が納まります。親の癩が納まれば子供の癩も歸りには大體治ります。實によく出来て居ると思ふのであります。

ですから私は、本質的には色々迷信的に脅しつける様なやり方でも、實は却々面白いものだと思ひますが、此處で話すれば斯うですけれども、それが分つて居てやつたのぢやおかしいし、やれもしませぬ。「よく出来て居るもんだ、嘘をついてもつかぬでも血なんか吐きはせぬ。兎に角呑んで見ろ」と云ふ事は成立しない話ですから、さうしてもあゝ云ふ事は恐怖に惹へる宗教になるのであります。この手は絶対に使はない様にしたと思ふのであります。

そこで私は、宗教の心理的根本が恐怖であるに云ふ考へ方を、學問的理論で云々する事は、さうでもないゝミしまして、さう云う根據のものに恐怖を濫用される事を非常に惧れるのであります。而も我國等は、原始宗教の形態に於て、澤山残

つて居ります。私は、宗教家が私達に言ふ言葉の中に、神様云ふものを、まるで自分より駄目なものに引下げて居る。神は癩癩持にましく、機嫌買ひにましく、なんて云ふ事を言つて居る。キリスト教の舊約聖書にも、神の心持を色々に言つて居つて、新約では少しも言つて居ないのであります。新約——所謂キリスト教の神様は、お怒りになる事はないのであります。舊約のエホバだけが怒るのであります。キリストの父ゴッドは、怒らないのであります。その區別を、私達はハッキリつけたいと思ふ。

幼稚園で、あの柔かい氣持の子供を脅かす事は、一體全體よくない事ではありますが、然し他の場合に於て、さうせ不完全なるあの本能で露出して來る子供に、本能でぶつかつて行かうとする時に、多少の脅かしも、恐れ云ふ様な心理を利用する事も、絶対にいかぬと言へませぬ。先生も、時に怖い顔をしてお見せになるのもいゝ。さうして子供に恐怖を起させ、あの、本能で擴がらうとする氣持を一寸萎縮させる云ふ事は、手段としてはさう絶対に禁止すべきではなからうと思ひます。それで、それが宗教教育に利用されて來る云ふ考へ方は、絶対にいかぬと思ふのであります。

こゝで私は、宗教性が、教養性云ふものとの關係がある云ふ考を、ぴつたり禁じて了ひました。それは恐怖には似て居るけれども、何處迄も人格の根本を失はない。人格でやつて行くこゝ即ち感謝云ふ事に歸着するこ斯う云ふ風に見て行き度いと思ふのであります。

そこで、恐怖性を本體としないで、何處迄も感謝云ふ事を本體として、宗教の態度を養つて行かうとする、その感謝云ふ事は宗教の本質である。自分云ふものを小さくする云ふ經驗に即する事ではありますが、而も恐怖の如く、人格迄没却して了ふものでなく、人格は何處迄も主體になるのである云ふ事になります。

道德に就きましても、感謝をよく感ずる人は、人格の内容の大なる、しつかりした人だと言ひ得るのであります。感



謝性の少ない人は、寧ろ人格的に小さい人だと言はれる位に考へます。さう云ふ事を先程申上げましたが、もう一つ感謝性の事に就て落しなりませぬ事は、この感謝云ふ様な事は、今は宗教に依て行く心的要素として研究致しましたが、感謝云ふ事は實はその人格的ニ云ふ意味に於て含まれて居ります如く、實に人間的經驗の特質を非常に豊かに豊富に持つて居るものであります。恐怖云ふ事は、何方から言ひましても、人格が働いて居りませぬし、恐らく恐怖の對象になりますものは、これは人間性とは言へなくて、多分化物性ニ云ふ様な事が多いと思ふのであります。人間が恐怖の對象になる云ふ事は、もうその對象になつた時にその人の人間性がヘンテコなのであります。皆さんの中には、子供達が私を恐れて居る、ミ威張つていらつしやる方があるかも知れませぬが、その時は少し怪物性を帯びて居るのであります。怪物でありまして人間ではないのであります。そんな事を言つてみんなに力が出るカウん！なきゝ言ふのは怪物の恰好であります。人間の恰好ではないのであります。感謝される云ふ對象は、これは何處迄も人間的なのであります。

そこで、宗教云ふものは勿論超人間的なものを持つて居りますが、子供にその日常の生活經驗の中で宗教的教育をして行かうとする時には、いきなり、神様を人間から別なものとして與へて行く云ふ丈では、機會も少しいし、幼兒には分り難いのであります。さうするに、神様云ふものが怪物になつて了ふのであります。そこで、神様は人間ぢやありません。宗教は人間的だけのものぢや決してありません。人間的なる生活經驗の教養から、宗教教育の方へ繋つて行く道がされます事は最も自然であり、健全なる結果を生ずるものであると思ふのであります。その意味で感謝云ふ事を本體に致しまする時に、語り對象を人間的に見て行きますから、その人間的に見て行く神の繋りは、佛様の繋りは、皆様が子供との關係に於て代表出来るものであると思ふのであります。皆様は、さうか斯う言つて頂き度い。「あんたは神様云ふものを知るまい、佛様云ふものを知るまいけれども、丁度私の様なもんだよ」云斯う仰言つて下されば宜しいので

あります。私云ふのは皆さんの事であります。私の様なものだと言ふに子供は眼を見開いて「あらまあ、そんなにモダンな方？」と仰言るかも知れませぬが(笑聲)そのモダンであるかどうかは別にして、或は「いやよ、神様なんか、そんなに太つてない」と仰言るかも知れませぬがそれも別として——兎に角、神様は私の様なもんだ——私は神様の様だと言つては少し失禮です。いくら大人が聞いて居なくても滅多にそんな事は言ふものぢやありません。幼稚園の先生は、大人が聞いて居ないからと言つて勝手な事を時々言ふ様ではありますけれども、斯う云ふ事は言はない方が宜しい。——けれども、神様が私の様だと言ふのは宜しいのであります。詰り、私の様だと言ふのは、私、プラス云ふ事です。私は神様マイナスである云ふのは、されだけ引いて居るか分りませぬ。マイナスアルファ云ふのはないのであります。この、私の様だ云ふのは、何處かと言へば、詰り人間的感謝の對象、その關係であります。即ち人間的關係の教養が、宗教教養に直ぐに自然になつて行く云ふ意味に於きまして、こゝの感謝性云ふものも生きて來るかと思ふのであります。

更に斯う云ふ事を私は考へる。感謝云ふのは、勿論實際經驗をしましては、對象云ふ様な事に於て感謝するのであります。あなたに、あの件に就て感謝するのであります。この人に、この件に就て感謝するのであります。誰にだか分らぬが、何だか分らぬが、兎に角感謝するなん云ふ、そんなあてのないことではない筈であります。然し乍ら茲で考へ度い事は、この感謝性云ふ様な事は、その感謝性のその實行はさうであります。斯う云ふ事が心持の中に浸込んで來ます。何んなき、所謂感謝に用意せられたる心持云つた様な状態に、性格がなるのであります。人格がなるのであります。ポテンシャルサックスと言ひませうか……潜在感謝、所謂あの電器の中に蓄めてあります電池はポテンシャルであります。別に今電氣としてピチ／＼働いて居るのではないが、直ぐにその状態になつて居りますが、人間の生活の中に、この感謝云ふものが、蓄電器に蓄へられたる如く蓄へられる状態になるのであります。

朝、よく寝た後！甚だ尾箱な話でありますが、腸内が（町内——近所）云ふ譯ではありません。おだやかであります。よく寝て居りますから、ハッキリして居る。天氣は好し、風はよし、何だかいゝ心持になる。それは感謝云ふ形……ハッキリ意識して居りませぬが、ポテンシャルサックスであります。一寸やるゝ直ぐ感謝になるのであります。私は、他人の所に物を持つて行つたりするのは、朝早く持つて行きます。さうするゝ紙屑一枚持つて行つても感謝する。向ふが疲れ切つて、感謝は何れ明日云ふ時に持つて行くゝ、却々出ませぬ。さう云ふまあポテンシャルの状態、これが、朝に限らず、その人のキャラクター全體になつて、始終ポテンシャルサックスで歩いて居る人があります。ニヤ／＼笑つて歩いて居る人があります。私は、人間を見るゝ直ぐ調べる。空の電池云ふ這入つて居る電池。空は役に立ちませぬ。空の電池云ふのは、よく／＼の事をしなければ嬉しに行かぬ人であります。一觸即發の状態になつて居ない。一觸即發云ふゝ甚だ危険な状態でありますが、さうだゝ思ふ。これも、他の事で一觸即發では困る。一寸側に行くゝ直ぐ戀愛性一觸即發云ふのは非常に困るけれども、（笑聲）感謝の方で斯う云ふキャラクターになつて居りますゝ。感謝すべき對象があつて感謝する順序ですけれども、かるが故に感謝するゝ云ふ理窟があつて感謝するんですけれども、純人間心理的問題になるゝ。感謝性がこつちにあるゝ、その感謝性から感謝の對象を探し出すのであります。そんな事は、お若い方の澤山いらつしやる處で言ふのはさうかゝ思ひますが、意識するゝ意識しないゝに拘らず、始終聲探し云ふのは、若さんのポテンシャルティーであります。その意味で始終感謝の對象を探して居る人がある。敵に會ひ度い云ふのは敵討だけの話です。敵討で世界を廻つて居る人は私は大嫌ひであります。非常に厄介千萬な事を、好んでして居るゝ思ふ。所が、お禮廻りで、何處かにお禮の恩人はなからうかゝ巡禮して居る人を見るゝ大好きです。人生を巡禮ゝで渡る人ゝ、敵討で渡る人ゝ大變な違です。この間も京都に行きまして、非常に好い景色を見ました。此處を通るゝ、「彼處で宮本武藏がさうしたゝか云

ふ處だから行かう」云ふから、斷つた。それよりもお寺の横の方を通つて巡禮に歩いて居る人の通りすがりでも見る方が  
「ごんなにいゝかと思ふ。この巡禮心の小さいのを養ふのであります。小巡禮——四國なんかには小巡禮が居ますが、あれ  
はよくないが、心持では小巡禮云ふものはいゝ。チビ巡禮……實にいゝ。さうしてこの小巡禮は、何も笈擢を背負つて、  
自分を捨てたお母さんを探しに、阿波の鳴門の悲しい感謝ぢやない。幼稚園に毎日來ます。心身を健全に發達せしめられ、  
善良なる性情を涵養されて、宗教教育の本當の感謝性の指導が與へられて、恐怖性でなく感謝性が與へられて居る子供で  
す。私は、先生ミ子供が、朝幼稚園の門でお早うを言つて居る時に、時計を見るミ成程遅くないけれども、大變に違つた  
氣持で言つて居る事を聞く事があります。子供の方では「お早う」……巡禮の挨拶。先生の方では「お早う」……これか  
ら厄介——（笑聲）——。大變な違ひであります。その所謂小巡禮の氣持で世の中を渡らせる様にして置けば、感謝を何處か  
で探すのであります。その對象が、ごんないゝ對象に巡り合ふか。或は猫だらうか犬だらうか、これは宗教教育の中の別  
個の問題であります。尠くも幼児教育のところで、ミの對象を拜ませよう、感謝させよう云ふ事は、却々難しいのであ  
ります。

これは色々の事で行きます。勿論本當に正しき感謝への對象に行く様に指導する心掛は小學教育等でも非常に必要であ  
りますが、こゝで兎に角、ごんないゝ對象を後になつて與へ、ごんないゝ對象を出して來ました所で、感謝性のポテンシ  
ヤリティーが小さい時から養はれて居なければ、その觀音様にはつかないのであります。さうして、折角の觀音様に、又  
態々お禮に行つたりする。或は、觀音様だつて怖いかなと思つて見たり、全く違つた事になるのであります。ですから私  
は、全體的ポテンシヤリティーを養つて行く意味に於て、感謝云ふもの獨特の、相手を段々競り上げて來て、何處かに  
持つて來たい。——恐れ度いなんで云ふ人はなからうと思ひます。恐れが慢性になりますミ、神經衰弱になる。臆病者に

なる。さうして臆病になり神経衰弱になり、恐怖症になつた時に、恐怖の對象を探して居る者はない。怖いもの見たさ云ふ事もある様ですが、あの怖い親爺に會はぬ様に逃げて隠れて居る心理であります。

所が感謝の方は、恐怖を全く違つて、相手を探さず迄は落着かぬのであります。私は心の感謝の一杯になつた對象を見つけ、直ぐに終つて行くその温かい淋しさ、その明るい物足らなさ、そんなものを人間性の中によく見るのであります。そこ迄相手を探すのであります。何處かに宗教を建設せずに居られなくなつて来るのであります。感謝性が、如何に宗教の要素として重大なものであるか云ふ事が申し得ると思ひます。この意味で私は、感謝性云ふものを、非常に重要なものご考へるのであります。心身を健全に發達せしめられ、善良なる性情を涵養されて居れば、こゝに行きませう。餘り身體が弱いと、性情が善良でハリキリボーイの様な事には行きませぬ。きつと感謝性に行きませうけれども、それだけで私が物足りないのは、人類文化としてのあの大きい宗教云ふものがある。

そこで話を今迄の元のところに結びつけて、子供が往來で神様にお辭儀をして居る人の姿を見て特殊なる感情を持つ。「何だか人がお鳥居の處でペコ／＼やつたぜ」。ペコ／＼やるのは、お鳥居の前でも焼芋屋の前でもやつて居るのであります。その姿が特殊なる感激を起すのは、子供が、まだお鳥居の中に何があるか知らぬのです。自分の對象はまた知り得ないのですけれども、その一般的疑問的感謝性云ふものがある。何所かにそれを持つて行き度いと思ふ。それが、それをやつて居る人を見て、特別な感じを持つのであります。だからその經驗云ふものが重大な事になる。その重大云ふ意味は——私はこゝで、幼児が持てる物云ふ事を二つに分けて、家庭なり社會なりの宗教教示、宗教事實から與へられて來るものと、子供の心の中に心理的に湧出するものと、二つに分けてお話致しますが、人間性は社會に生きて居り、文化云ふものは社會に存するものである。その文化云ふものを結びついて、始めて個人の心理的經驗が實體化して來るこ

云ふ意味に於きまして、こゝでは、その二つは二つでなくなつて來るのであります。若しも子供が、唯家庭なり社會なりに於きまして、人がやつて居る宗教經驗を見まして、一種の興味を以て持つて來るだけならば、これはそれだけの話であります。けれどもそれは他の場合と違つて「先生、今日はね、往來を歩いて居たら水蜜桃があつた、今日は大きなメロンがあつた、その前を、たまらない氣持で通つた。彼處の横丁でね、柳の蔭でをちさんがアイスクリームを食べて居た。それを見乍ら來た、食べたいな」と言ふ。これを私達はそんなに一々取上げなくても宜しいかも知れませぬ。これは、何故取上げなくてもいゝかと言へば、その子自體がさうである云ふのでなく、それは子供の食欲を本能で結んで居る事に過ぎないから、そんなに取上げなくても宜しいのであります。けれども今の宗教的經驗の場合に於きましては、本能を結びついて來た偶然的興味ではなく、その所謂人格的問題として繋りがあるのでありますから、苟くも宗教經驗に關するものを子供が齎した時に於ては、それは通りすがりの偶然的社會的環境の影響を見るアイスクリームだの何だのと一緒にすべきでない云ふ事が考へられて來るかと思ふのであります。この意味に於て、これを非常に重大であるを私達は考へて來るのであります。

斯う云ふ意味で宗教教育の問題を分解して、その一つであります感謝性、これが主でありますから、この爲に大變時間を費しました次第であります。

幼児の心に、宗教そのものとしての纏りのついたものが、まだ缺かれて居る譯ではありませぬ。然し乍ら斯う云ふ點を正しく養成して置けば、それは自ら綜合して、宗教的態度の方に向けて行くものである云ふ意味でその主なる要素を探して見ました所が、第一は感謝性ではないか云ふ事になつたのであります。

さうも、相當の立派な宗教でありまして、何か極端に申しますならば、願ふが頼むが、詰り得るところあらう。

して行く心持が強く働いて居るものでありますが、人間は自分の力の弱さを感じました時に、さう云ふ心持になります事は止むを得ない……と言ひますか、全く當然の事でありませうけれども、然しその求める、要求する云ふ様な事だけが強く勝ちます云ふこと、或はそこから迷信云ふ様なものが起つて来るのではないか、斯うも考へられます。迷信はさう云ふものであるか云ふ事をハッキリ言ふ事は非常に難しい事でありませうが、或は、詰らない、信するに足りない対象を信する云ふ事が、迷信の大きな特質でもありませう。けれども然し、宗教的な態度云ふ方から、健全なる態度、不健全なる態度、その不健全なる態度が迷信を名付けられ得るものだ云ふ風に考へて行くさしますれば、唯この、何か要求する云ふ様な心持だけで、尠くも其方が非常に主になつて居ります場合は、健全なる宗教的態度は言へないかと思ふ。

それならば、詰り人間性の餘り高等な部分から出て居る事ぢやないのでありまして、苦しい時の神頼みであるとか、或は死にかけてそれから宗教に行くとか、或は色々御利益で奨められて行くとか、言ひ換へれば慾がもこになつて起つて來る場合は尠くも高等なる心から出て居る言へませぬ。世間に澤山あります所の所謂迷信、或はこの頃謂ふ所の疑似宗教即ちインチキ宗教云ふものは、大抵その氣持が主になつて居るのぢやないかと思ふのであります。これに對しまして、もこより人間でありますから色々さお力を惜り度い、頼り度いけれども、然し乍ら先づ何こなき、宇宙自然絶對に對する感謝の心が先に湧いて居りまして、その感謝の心で宗教的生活に入つて來る。その上で色々御厄介になり度い。勿論人間の事でありますから慾も出て來ますが、然しそれは寧ろ感謝して居る上の話でありまして、その慾を與へられて、それで有難い云つた様な事では本當の宗教的態度を言へないかと思ふのであります。

(以下次號文責在記者)

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽  
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三  
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
  - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
  - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
  - 一、雜誌發行(毎月一回)
  - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
  - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
  - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 會長 一名 會務ヲ總理ス
  - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
  - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
  - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ヲ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推薦スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

|      |            |            |    |     |    |
|------|------------|------------|----|-----|----|
| 一ヶ月分 | 金參拾五錢      | 特等面        | 一頁 | 二等面 | 一頁 |
| 半ヶ年分 | 金貳圓拾錢      | 一等面        | 一頁 | 一頁  | 拾圓 |
| 六ヶ月分 | 金貳圓拾錢      | 金拾五圓       | 御斷 |     |    |
| 拾ヶ年分 | 金四圓貳拾錢     | 廣田區駿河臺ノ三品田 |    |     |    |
| 廣告   | 廣告社に御申込下さい |            |    |     |    |

(外國郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)  
 昭和十二年十一月十三日印刷納本  
 昭和十二年十一月十五日發行

幼兒の教育 第三十七卷 第十一號

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋 惣三  
 發行所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
 印刷者 柴山 則常  
 印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
 會社 杏林 舍

發行所 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
 振替口座東京一七二六六番

注文規定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵稅共)で願ひます(郵券代用の場合には總て一割増)
- 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます
- 一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたします。其節は早速御送金を願ひます
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます



# 楽しい降誕祭とお正月の手技材料

豊富に取揃へて御用命をおまち致します。

後藤先生の新年各手技も揃つて居ります。

- ◇ストッキング用折紙 五十組 一圓
- ◇キャレンダー掛星形 十枚 五〇錢
- ◇星 一箱 三五錢
- ◇校の葉 一箱 三五錢
- ◇折紙用状差材料 十枚 三〇錢
- ◇舞玉 一枚 時價
- ◇羽子板 十人分 一〇錢
- ◇風用材料 五十個 一五錢
- ◇獨樂用材料 五十個 八〇錢

後藤牧星先生案新手法——各種一組二〇錢宛

- ウキンド・ミル 十枚一組
- 仲よしソー 十枚一組
- 壁掛兼用孔雀箱 十枚一組
- 菊花模様おやつ入 十枚一組
- サンタ・クローズのお土産袋 十枚一組



## 食館レベールフ 社會株式

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本  
 番七二八三(24)話電・五町後備・區東・阪大 所張出

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可  
(毎月一回十五日發行)

昭和十二年十一月十三日印刷  
昭和十二年十一月十五日發行

定價三十五錢